『九州帝國大學新聞』第二百六十九号
昭和十八年十月二十日　水曜日

「学生諸子に告ぐ」総長荒川文六

大東亜戦争が開始せられてから将に満二年に垂んとして居る。顧みれば昭和十二年七月北支盧溝橋の附近に於て支那事変が勃発してから六年、更に遡つて昭和六年九月奉天の北方柳条溝に於て満洲事変の端が発せられてから数へれば実に十二年の歳月が経過して居る。満洲事変、支那事変、大東亜戦争と其の呼称は変つて来ては居るけれども、其の間に一脈の連繋がある事は申すまでもない処であつて、事態は当然進むべき処に進展し来つたのだと云ふ感じは、国民の誰でもが抱いて居る処だと思ふ。

世界に覇を制せんとする米英と八紘為宇の肇国の精神を以て共存共栄の楽を偕にする世界を実現せんとする我が国とは、其の主義に於て、其の思想に於て雲泥の差があり、氷炭相容れないものがある是れが実に今次の戦争が始められた原因であるし、又之を徹底的に勝ち抜かなければならない所以でもあると申して差支ないであらう敵米国の大統領は、米国は何の為に戦ふやとの質問に対して、或は真珠湾の奇襲に対する報復であるとか、或は世界の自由の擁護の為であるとか、或は国民生活の保証の為であるとか、種々の言を設けて之を説明しやうとして居るけれども、何れも皆世界制覇の為であると云ふ真の目的を擬装して居るに過ぎないのである。翻て我が宣戦の詔書を奉読するに、我が国が蹶然起つて矛を執るに至つたのは実に彼等の行ふ処が東亜安定に関する我が国多年の努力をして悉く水泡に帰せしめ、且つ我が国の存立をして危殆に瀕せしむるが為であつて、真に已むを得ないものがあるのである。宣戦の詔書に『今ヤ不幸ニシテ米英両国ト異端ヲ開クニ至ル洵二已ムヲ得サルモノアリ豈朕力志ナラムヤ』と宣わせられて居るが洵に畏き極みである。

大東亜戦争は開始以来、御稜威の下、我が忠勇なる将兵の努力によつて着々として戦果を挙げ、又東亜共栄圏の建設も亦漸を逐ふて確実なる進展を続けつゝあるのであるが、世界の情勢は未だ楽観を許すべき状態に立ち到つては居らず、戦局も亦日に日に苛烈の度を加へ来つて居る。而して敵米英は其の擁する莫大なる物的資源を動かして一挙に我を厭迫崩壊しやうと必死の反抗を試みて居るのであるが、我々は今や我々の全力を挙げて彼等の企画を破砕し、彼等を屈服せしめ、以て此の戦争に最後の勝利を得なければならない所謂決戦の段階に達して居るのである我が国が東亜永遠の平和を確立して以て我が帝国の光栄を全ふせんとする途は外にはなく、唯此の戦争に勝つ事である。今は実に『一旦緩急アレハ義勇公二奉シ』との勅語を実行する時が来たのである

此の如き重大なる時期に於て茲に新しい学年が開始せられたのであるが、既に公表せられた通り政府は在学の事由による徴集延期の制度の停止を断行して理工科系の学生に対して入営延期が認められる外、総ての学生生徒は学業を中絶して国防の第一線に立つ事と致したのである。是れは全く現在の如き状態に於ては戦争完遂の為には已むを得ない必要な措置なのである。学生諸子の大部分は近く臨時検査を受けて、それぞれに召に応ずる事となるであらうが、出でて軍務に服する者も、残つて学業に勤しむ者も、皆等しく大命を拝し召を受けた者であると云ふ事を心に留め、一身を捧げて公に奉ずるの実を挙げられる様祈るのである。

元来諸子が本学において学業を修むる目的は、平時においても決して一身一家の為ではなく、国家のために役立つ有用の人材

たらんがためであることは申すまでもない処であるが、現今の如き非常の時においては、これが一層明かにせられる訳である。即ち征く者は剣を執つて敵を撃滅する為に一命を棄つるの覚悟を以て征途に上ると共に、止る者は其の知能技術を磨いて、之を以て敵の勢力を打破する為に身命を蜷つて其の全力を尽さなければならないのであつて其の心構へに於ては、征く者も止る者と少しも異る処があつてはならないのである。

元より学業を修めて之れによつて君国のために尽さうと志した諸子であるから、学徒として勉学にいそしみ、其の途に於て報国の誠を致すことを務めるのが本来ではあるけれども、一旦大命が降つて君国のために尽す他の途が諸子の前に開けた場合には、欣然起つて其の途に進んで御奉公をなすのが日本国民として当然のことでなければならない。否、寧ろ現下の如き我が祖国の危急存亡の秋において国家の要請に応じ、それぞれの立場において御奉公を為す事を得るのは日本国民として洵に本懐の至りであり、又光栄であると申さなければならないのである。私は茲に衷心より諸子の武運および文運の長久を祈り、諸子が何れの途に行くにせよ、又如何なる任務が諸子に与へられるにせよ、誠心誠意、飽くまでも九州帝国大学学生たるの衿持と名誉とを傷くる事なく行動せられん事を希望して止まないのである。

征く人へ」法文学部学生主事」古賀克孝

征く諸君への激励の言葉をとの注文だが、すでに沈毅なる心境に在つて勇躍の日を待つ諸君へ今更の激励も、却つて徒らに調子を高めさして無駄な結果を招くだけのこと、ほんの蔭ながらの心持を披瀝してお送の辞とし度い。

必勝態勢の強化を期するため陸海軍に所要の幹部を補充する必要上学生の徴集猶予を全面的に停止臨時徴兵検査の施行、法文系統学生の入営等一。決戦の様相苛烈を極むるの秋、まことに当然の措置であると申さねばならぬ。

併し発表の日より入営まで残す四十八日間、学窓に在りても祖国の急に心を燃やしてお召しの日を待ちに待つてゐた諸君ではあるが急なる発表であつたゝめ、心物両つながらのその環境整理の面に於ける落着き振り如何が私の関心するところであつた。しかし、うれしいかな、私は何等の関心も有たなくて宜しいことを知つた。まことに頼母しい。まことに有り難いことである。それもその筈である。

それにつけても、過ぐる年、私がお召しを拝したときの心境をそぞろに想起するのだが、そのとき自分のやうな者でも斯んなに澄み切つた心になれる日があると嘗つて予想したらうかと、自分ながら自らの心の清明にわけのわからぬまゝ涙したことがある。

ましてやである。支那事変に続く大東亜戦争、諸君はこのさ中に学びの道を進んで来ている。また自づと私等と異る即ち更に高い更に深い心境にある筈であると信ずるのである。

発表以来既に旬日、お召しの日までのこす月余、内に烈々の赤心を深く蔵しながら、外かすかな動とてなく平常といさゝか変ることなき学生生活の日々を見るにつけそのけなげな、沈毅な人としての尊さに打たれずには居られない。

去月法文学部送別式に於て、海軍予備学生として出で征く人と卒業生に対しては、お召しを拝した人としての、特に大学出身の入隊者としての心構へに関しては既に私の尽したところであつて、式には在学生諸君も列してゐたので、更に重ねるの要もないと思ふが、蛇足を容して貰つて一こと参考に供し度いと思う。

諸君がお召しを拝して入隊すれば直ぐに感得することだが、それは隊内隅から隅まで漲つてゐるところのあの逞しい空気である。一言の批判なく唯服従、寸時の傍観許されず唯命令奉行、全て言語が実行と一体となり切つた強い意志の空気、ともすれば圧倒されずにこちらが積極的なる心を持し得るか、我と我が心を挺してまずこちらからそれの中に飛び込むことの一事である。

追想し勝ちな過去を堅く鎖して追想せず、是までに自ら養ひ得た教養、知識、体力を最高度に活かして一先づ最もよき一兵卒、最もよき一水兵になり切ることより外はない。それが第一等の心がけである。そして日ならずして見事な逞しき軍人となつて思ふ存分君国のため御奉公あらんことを期待する。

諸君、諸君の先輩はすでに現在軍服を着して諸君の来るを俟つてゐる。諸君の後輩は諸君の後に続く日の来るのを俟つてゐる。何の心にかかる不安もなく、足を高くとつて朗かに、元気に征かれたい。偏えに諸君の晴の御健闘を祈つて已まぬ次第である。

（昭和十八年十月十四日記）

学徒の征くを送る」高木市之助

大御いくさたけなはなればたゞならず空ぞかゞやふいざ征け友よ

身に代へて思ふと宣らすすめろぎの国を身に代へて護らざらめや

学生の覚悟清しく受け堪へて静かに送る人の父われは

『九大』はたゝかう君かあけくれのなにか明るき思出となれ

一法文学部教授一

送別の言葉」九州帝国大学法文会長」菊池勇夫

大東亜戦争はまさに決戦の段階に入り、わが九州帝国大学法文学部につどふ一千の学生もこぞつて出陣する日が来たのである。今や召しに応じて祖国の難に赴く学生諸君は、服務を光栄とし真にかへりみなくて出立つ軍人精神の伝統を切実に感じてゐることと思ふ。

学生諸君の出征に際し、大学生としての入隊であることにつき私は次の二つの点に注意を喚起したいと考へる。第一に学問精神は諸君の服務の中に生かされねばならないと云ふことである。『人生れて学に在らずと云ふことなし』と述べた山鹿素行は、学問において『学文』よりも『好問察邇言』を以て重要とした。すなわち『圃のことは老圃、農のことは老農に尋ぬるごとくいたさば皆学問となるべし』と説いてゐる。又学習の意義について『習の字は行にかかる。学べることも行にならはし考へざれば皆口耳の学と云ひて実の学問にあらざるなり』と述べてゐるのである。このやうな意味での学問精神は、軍隊教育を受ける場合だけではなく、駐屯する各地の文化や民情を察するについても、さらに戦場における生死の間にも発揚されねばならないものであると思ふ。

第二に学生諸君が前戦に在つて勇戦奮闘することは、祖国と共に母校の学園を守護するものであると云ふことである。諸君のすべてが学園を去つた後においても、研究室を中心とする研究調査は諸君の出征により激励を受けて続けられるのであり、学灯を高くかかげて諸君の再来を待つことになるのである。そして母校における教育の停止によつて閉ざされた門を開く鍵は、実に諸君が堂々と勝どきを挙げて凱旋する日のその歴戦の手中に握られてゐるのである。

新学年の開始に当り諸君が差し迫つた短期間を学修生活に集中して静かに落着くことを希望したのであつたが、われわれの期待以上のたくましい意思を以て学業に又修練に精進せられたのを見て、まことにたの

もしいと思ふ。そこにはかの千万の敵も言挙げせずにとりてきぬべき大丈夫の気概をも感ぜられるのである。今後各種の服務において諸君の忠誠を確信すると共に、ひたすら勇健にして武運長久ならん事を祈るものである。

顧れば私が本紙の創刊号を手にしたのは在外研究員としてパリに滞留中のことであつた。ここに法文会新聞部の事業としては終刊となるべき紙上に執筆するについては感慨殊に深いものがある。わが学部は開学以来正に二十周年を迎へ法文会も亦十八年を経たのであるが、その間本紙は創刊以来十七ヶ年常に大学新聞としての役割を果して来たのであつて、歴代の新聞部員の努力には衷心より敬意を表するものである。

筆の重きこと錐の如く意を尽し難いが、以て出征の行を壮んにし併せて本紙の永き休刊を惜しむ言葉とする。（昭和十八年十月十五日稿）

学徒出陣に寄す」纐纈理一郎

夢かあらずいままなびやゆ若人らの維の鎧きてこくなんに征く

緩急の秋こそ来つれ筆をおき大みことのりかしこみて立て

たたかひの庭にいのちを賭する間もゆめな忘れそ学徒のほこり

一農学部教授一

『ただ』の一言」下田光造

学生が打算的になつたとか、明朗性を失つたとかいふ声を聴くこと久しかつたが、これは、学生もまた社会潮流の圏外に超然たり得ない証左に過ぎなかつた。而るに支那事変から大東亜戦争に進展して事態が国家存亡の分岐点まで登りつめた現在にあつては、国民はすでに、総てを君国に捧ぐる貴い心構へが出来て居る。吾等は、平時に於て十年二十年、時に一生の苦行によつてのみ達し得る没我の境地を、此大戦により生死の関頭に立たされたお蔭で、一朝にして体得したのである。それは西郷南洲が、生命も要らず名も要らず官位も金も要らぬ人は度し難きものなり、然れども此の度し難き人にあらざれば共に天下の大事を語るべからずと言つた、五欲八風の羈絆から開放された境地である。

而して諸君は今や、此の滅私の歓喜を抱いて召に応ぜんとして居るのである。帰つた時にどうなるかという様な事は、死生一如の絶対境にある現在の諸君にとつては問題でない、左様なことは、それぞれの人達の論議に任せて置けばよい。戦捷の暁には、想像も及ばぬ雄大豪快な天地が諸君青年を迎へるではないか、戦ひ敗れなば国民皆死ではないか。

諸君、ただ征け、而してただ戦へ、我等もまた、銃後に於てただ戦はんのみ。

『ただ』の一語を以て餞となす。

一医学部長一

身の鴻毛は」国家のためのみ」宮崎鉄太郎

九月二十二日午後七時三十分東条首相は国内必勝態勢確立に就て放送せられ我学園の文科系学生は直ちに剣を執つて勇躍征途に上ることになつた、男子の本懐正にこれに過ぐるものはない、それに対し理科系学生は尚一年乃至三年科学技術の研鑽に専念せざるを得ぬ。洵に脾肉の嘆に堪へざるものがあると考へるが、征くものも停るものも一切を捨て凡てを君に捧げ奉つた身、承詔必謹尽忠報国あるのみである、而して斯の如き信念につきては故山本元帥も申された如く、今頃の学徒には頭を下げざるを得ぬ。来る二十日大学は征く学徒のために壮行会を催すことになつた、先日来我工学部に於て文科系学友のために大会全体としての壮行の催しを熱望して来るもの頻頻たる際とて、私は一層感銘深きを覚ゆる、征く

学徒に対し私には御願ひがある、それは皆上御一人の至宝であることを肝に銘ぜられて、命を鴻毛の軽きに比すと言う言葉には前提のあることを猛省され、君命によるか又は真に国家が必要とする場合の外は身命を大切にせられんことである。武運長久を祈る。（一〇、一四）　（工学部長）

征く友を送る」平光吾一

ペンを投げ角帽すてて御楯とぞきほう学生の眼の光りはも

国守るやまと心の一筋に学生もペン捨ててきほふなり

征けや征け老いのわれ等もつゞかなむ御楯ときほふ心一つに

一医学部教授一

学徒出陣に寄す」矢崎美盛

この聖戦には勝たなければならない。このことは絶対である。吾吾は、生命を棄てて、国難に赴かなければならない。

人間といふものは、案外、無意味な死に方をも為し得る動物である。一時の感傷や興奮や、無智による迷信や、はかない感激や、故意の煽動や、さうした迷妄にうながされて生命を棄てる例も尠しとしない。しかしながら、吾吾学徒たるものは、かかる迷妄によつて生命を軽んじてはならない。いやしくも学徒たるものの生命を棄てんとするに臨んでは、確固たる信念、基礎づけられたる確信にもとづかなければならない。

この信念を養ひ、この確信を構成するために、いま諸君の大学生活は余りに短かつたかも知れないしかし乍ら、大学学徒たるの衿持は、すでに植えられ、すでに培はれてゐる筈である。諸君の執る殉国の剣は、まことに学的に基礎づけられたる破邪顕正の利剣でなければならない。諸君自ら、諸君の剣を砥いで、げに然るものたらしめなければならない。逞しき学的精神を提げて、尽忠報国の途に征かれんことを祈る。

一法文学部教授一

益良夫の歌」竹岡勝也

この頃入隊される学生諸君にしばしば署名を需められる場合があるかうした場合には、何時の頃からか一首の歌を書く習慣になつた。国旗の前に端座して歌を練つて見る。それは私自身のためにも必要な生活だと考へたからである。一度書いた歌は二度書かないと云ふ方針でこれを続けて居る間に、何首かの歌が自分の心にも留まる事になつた。今益良夫の歌と題するものが即ちこれである

天地のよりあひの極み高光る日の御光ぞ吾が心なる

益良夫はいま朝立ちす清い々し日御光はさんらんとして

大君の命かしこみ朝立ちす益良武夫はゆゝしくあるかも

ふるさとはひんがしの空茜さすその朝雲におろがむ吾は

天地に生れて死ぬる現身の悲しき命今ぞ召さるゝ

大空は遥かなるかも千雲湧きふかぶかとして心伸びるも

風はらむ波のうねりのはろばろとわが益良夫の心にも似る

最後の一首は、初めて玄海を渡つた時、千波万波に伸び行く心を歌つたものであつたが、矢張りこの波、益良夫の歌に書き加へられ光栄ある歌として再生したものであつた。

一法文学部教授一

学生諸君の壮途を祝ぎて」重松俊章

諸君は此の度国家の戦力強化の態勢に従ひ、直ちに学窓から召されて、愈々第一線の配備に就かれることになつた。洵に壮烈

快心の極みで、国難下男子の本懐之に過ぎるものはない。諸君は皇国に生を享けて青春方に二十余年、此の間家にあつては常に温かい父母の慈育に浴し、郷党に在ては父老や先輩の親しい教導誘掖を受け、而して更に国家は年々莫大の国費を投じ苦辛経営せる帝国最高の学府に諸君を選抜入学せしめて、苛烈深刻なる戦時下にも係らず之まで極めて平穏裡に諸君に修学研究を継続せしむるの寛度と恩恵とを与へて来つたのである。此等の点を顧みる時、諸君は同輩の他の青年に比べて国家的にも社会的にも真に恵まれた多幸の寵児であつたと言はねばならぬ。

翻て現下の戦局を通観するに敵米英の醜夷は大東亜緒戦の痛撃にも懲りず、爾来約一年有半の間に漸く反抗の態勢を整へ来り、彼等の恃みて以て精鋭とせる学生群まで総動員して之を最前線に駆り立て、アリューシャンに、ソロモンに、或は支那大陸に、印緬国境にと、あらゆる方面から包囲網を張つて我が精鋭に雌雄を挑み、今やその決戦の容相は頗る深刻惨烈を極めているのである。諸君が日頃の絶大なる国家の期待に対へて起ち上がるべき時は今である。『国破れて山河あり』といふ語があるが吾々に取つては『国破れて何ものの山河ぞや！』である。悠久二千六百有余年、上に万世一系の聖天子を奉戴して上下親和、君臣渾然一体の一大家族国家を形成せる万邦無比の我が国体はどうなるか、三千年の我が尊い民族の歴史は如何になるか、吾が国の文化はその淵源する頗る古く、アングロ、サクソンなどの比ではない。ノルマン海賊群の漂盗民族が漸く英本土に建国した当時（吾が淳和天皇御宇、西紀八二七年）には我が国では既に飛鳥奈良期の荘重典雅な古代芸術を生みて絢爛たる王朝文学全盛の平安期に這入つてゐたのである。国破れてかかる悠久の発展を遂げ来つた我が国民文化の存立はあり得ない。

されば今こそ万邦無比の国体も悠久三千年の日本民族の歴史も其の文化も、否、現に我等を育み我等を養ひつつある此の神州の国土山河も江海島嶼も、総てその命運は一に此の聖戦の勝敗如何に懸つてをるのである。かゝる国難近迫の際に当り国軍の最精鋭として召されて第一線に乗出さるゝ諸君の光栄と満足とは察するに余りあるが諸君は此の際日頃国家が諸君に負荷し期待する処に背かず、飽迄沈着豪邁に各自の任務を忠実に完遂して、例令、屍は馬革に裹まるるとも米英撃滅に最後の凱歌を揚ぐるやう切に祈つて止みません。銃後に残る吾々も何時敵の爆弾を喰つて死ぬるかも判らないが生命の続かん限り千五百秋の瑞穂を一つ秋に束ねても食糧を増産し、細戈を千足りに弥足らしめても前線に送り届けねば息まない覚悟で張切つて居るから御安心を願ふ。

ー法文学部教授ー

学生諸君の」首途を送る」河村又介

精神文化の教育は自然科学の教育と同様に国家にとつて必要である。況して道義を標榜する国家に於てをや、更に況や自ら東亜の指導者を以て任じ、新秩序の建設に邁進することを使命とする国家に於てをや。

然しながら此の原則は必ずしも常に無条件に実行できるのではない。人間にとつては修養や勉学が一生を通じて必要であると言つても、生命の危険に瀕するやうな重い病患を治癒するために必要な場合には、医師の指図に従つて読書も勉学も一時之を停止し専心療養に力めなければならぬ。恰度それと同じやうに国家の生存が脅かされてゐる超非常の秋にあたり、此の危機を克服するに必要とあるならば、全力を戦争完遂に集中するために文化事業や教育を一時停止することも亦已むを得ない。

諸君は既に此の理をよく弁へ寧ろ髀肉の嘆を以て今日を待たれてゐたことゝ思ふ。私の知つてゐるある青年は、既に法学部を卒業し国家試験の行政科に優秀な成績で合格し且つ某有力な官庁に採用されてゐる身であり乍ら、此の国難を晏如として座視するに忍びず自ら進んで航空兵を志願したのであつた。先日彼れの入隊を上野駅頭に見送つたその友人たちは感奮に堪へ得ず何れもその後に続かうとする決意を固めたことであつた諸君も定めし同様の感を抱いて勇躍征途に就かれることゝ信ずる。

聞くところによれば此の度の徴集猶予停止の措置は、国家が単に普通の青年としての諸君を必要とするといふ理由からのみではなくて、特に高等教育を受けた頭脳優秀の青年に期待すること大なるものがあるからだといふ。曾ては一部の社会から白眼視せられたこともあつた知識人や大学生が、その知能に於てのみならず、義勇奉公の精神に於ても亦、如何に秀れた国民であるかを諸君の躬を以て実証せられるであらうことを私は固く信ずる。

幸にして輝かしい勝利が我が手に帰し諸君が栄えの凱旋をせられた時には、我れ々々は再び諸君をこの学窓に迎へて共々に旧の如く学業にいそしむであらう。我々は諸君の武運長久を祈りつゝそのやうな日の一日も速かに到来することを待ち望んでゐる。

ー（法文学部教授）ー

つわものと知性」進藤誠一

親愛なるわが法文学部の学生諸君、予て期したる事とはいへ、この度の徴兵猶予制度の停止は諸君の胸に深刻な衝動を与へたことゝ思ふ。しかしそれと同時に、開戦以来諸君の心裡に低迷してゐた懐疑、陰鬱、焦燥の暗雲も忽然として霧消してしまつたに違ひない。理科系の学生諸君もこれで愈々科学戦士としての責任を自覚して、一層緊張した生活にはいられることであらうが、わが法文学部の学生諸君は、一躍して身をもつて国士をまもり敵を撃砕するつわものとなることができるのである。戦時日本の若者として諸君の欣懐はまことに私たちの想像にあまるものがある。

忠君愛国はわれら日本人にとつては既に一つの本能である。しかも諸君の魂には知性の筋金が入つてゐる。諸君が生死の関頭に立たれた時、日本のつわものの真骨頂を発揮されることは既定の事実である。

今度の発表によつて諸君の中に相当の動揺が見られるであらうと私たちはひそかに予想してゐた。しかしそれは全くの杞憂であつた諸君は平然として、否不断にも増した好学心をもつて、修学にいそしんでゐる。これを日々目撃してゐる私たちの言葉に表はしがたい感激と感歎とは、恐らく諸君には分つて貰へないであらう。私たちの学生時代にかりに今度のやうな事件が起つたとしたら、私たちは果して今の諸君のやうな沈着と熱意とをもつて、応召の前日まで修業を続けたであらうか。思へばわが国の知性も大人になつたものである。この諸君の健実な、鞏固な知性をもつてするならば、数年間の学業の中絶が何程の損耗を生ずるものであらうか。私たちは驚異と満足との交錯した感情をもつて諸君の雄々しくも頼もしい出陣を見送るのである

ー法文学部教授ー

烈々たる気塊を持つて」張玄彦

前欧洲大戦後私は仏蘭西に留学したが、其の間機会ある毎に若い学生や子供等に『又ドイツと戦争が起つたら君等はどうする』と質問したが『もう戦争は懲々だ』と面を顰め乍ら何時も判で押した様な返事をなし只の一度も何時でも来いと言う様な烈々たる気塊を示す青年に遭つた事は無かつた。私は仏蘭西は早晩亡びるなと誠に淋しい憶

がしたのである。

所が大山柏少佐が給仕として連れて来られた僅か十五歳の独乙の少年は『此度は公爵の給仕として巴里に来たがこの次こそは兵隊としてやつて来て必ず城下の誓をやらせて見せる』と公言してゐた。

独乙の若人の此の気塊が七十五万の餓死者を出した悲惨のどん底から短日月の間に独乙を今日あらしめたと思ふ。

国家は若人の血によつてのみ培はれ、若人の旺なる意気によつてのみ栄へ行く、私は斯く信ずるのである。

今や西南太平洋の戦局は苛烈凄惨を極め、其の実情は世人の想像を遥かに超えて居ると聞く

誠に国家存亡の秋となつた

此の時にあたり御召を受けて兵に赴かるる諸君の胸中には御維新の際の志士の胸中に湧き溢れたと同じ憂国の至誠がたぎりつゝあると思う。

どうか元気で

我々はただ感謝の誠を捧げ、諸君の武運長久を祈り、元気な御姿を学園に再び迎ふる日の一日も速かならん事をのみ希ふ次第である

ー工学部教授ー

学徒の出陣を送る」神中正一

学生諸君と勤労作業に出掛けても掛声ばかりで体力之に伴はず、いつも自ら恥入つてゐたが、愈々国運を双肩に担ひ君等が挙つて筆を捨て剣を取つて出陣するに当り私も腑甲斐なく年をとつて、君等と行を伴に出来ないのは愈々申訳がないやうな心持ちになる。私には二人の男子がある。いづれ君等の跡を追つて行くこと故、いくらか自ら慰めている。此際私として千載一遇の国難に御奉公出来ることを無上の光栄に感じ、私に与へられた仕事に全力を傾倒し殪れて後已むの覚悟は君等に敗けない積りである。どうか諸君飽まで頑張つて下さい。終りに松陰先生士規七則より次の言葉を引いて君等を送らう。

死而後已四字　言簡而義諺　堅忍果敢　確乎不可抜者　舎是無術也

ー医学部教授ー

大学生たる」衿持と自覚を持て」堀豊彦

祖国の急は入学したばかりの若き諸君をももろともに我が学園から離れしめようとしてゐる。諸君が大学において学び、また学ぶべかりしものは既によく知らるるが如く歪められざる清純なる心をもつて人格を磨き、真理を愛するといふことである。このことは実に並大抵なことではない。いまや諸君はこのやうな清純な、しかも逞しい力に充ちて学園における精進をいとなむ代りに新らしい任務に携はらなければならなくなつたのである。諸君の委ねられる業が何んであらうとも、またその行くところ何処であらうとも、恒に大学生たるの教養と衿持と自覚とをもつて勇ましく最善を尽されんことを望みたい。さうして『私』を空しふするといふことは言ふべくして洵に行ひ難いことであるが、しかしわれわれはその携はる任務を行ふに際し恒に謙虚なる心をもつてこれに当りたいものである。同時にわれわれは自愛の心をまた忘れたくはない、自愛こそは決してもとより自己耽溺などであらうはづはなく、それはきびしい自己省察であり自己鞭撻であり且つあらねばならないからである。切に諸君の御健闘を祈る。（昭和十八年十月十二日）

ー法文学部教授ー

学徒出陣に寄す」宮本又次

法文科系学徒よ。既にお召しが出た。諸君等は満を持し、正に弦を離れんとする矢に似てゐる。静にして動、それはたまゆらの感激にみちた日日であつた。この切迫せ

るあわただしさの中にあつて、而も諸君は実に充実した緊張の生活を暮してくれた様だ。実際傍で見てゐるわれわれの方が涙ぐましい位であつた。教室では皆んな落ちついて冷静に且つ熱心に聴講して呉れた。ほんたうの所、狼狽してゐるのはわれわれ教師の方だつたかも知れないのだ。私は今更の様に若人の純真さ、誠実さに胸打たれた。ちやんと覚悟が出来てゐたのだね、一寸思つたより時期が早く来すぎたと言ふだけで、別に取り乱さなかつたのはさすがであつた、私はもはやゴテゴテ御説教やお題目を申さない。多少文辞を知らぬこともないが、あまりに白々しく、申す気にもなれないし、そんなことで今更鼓舞激励される諸君でもあるまい。

若人は今や正に海に陸に時々刻刻新しい歴史を作りつつある。諸君も亦その身を以つて新たなる歴史を作らうとしてゐる。私はしがない歴史家の一人として、日頃歴史を読み、歴史を書いて来た。併し歴史を読み蓄くことよりも、身自らが歴史を作り出すことの方が如何ばかり男らしくも意義あることであらう。四十に近い私ですらペンを銃にかへ、単に歴史を書き綴ることから、歴史を作り出すことに転換しようとの衝動を抑へがたい程だもの、諸兄の若い血潮はわくわくして、とてもじつとはしてゐられない何者かを感じてゐるに相違ない。

戦ひは日々熾烈を極め、反抗もなかなかである。勿論これを恐れ疑ふものではない。絶対不敗は肇国と共に与へられてをり、必勝の信念はいよいよ堅い。多少苦しい生活ではあるが汗をかいてゐるのはわれわれだけではない。図体が大きいだけ敵はわれに何倍かの汗をかき、苦しんでゐる。末端で、ソロモンやアツツの反撃があつたにしても、一年がかりの血みどろの反抗で、僅かこれ位しか戦果を挙げてゐないのを思ひ見るべきである、競馬に誓へて見るに、ルーズヴエルトの馬は今一寸見るに首だけやゝ先に出てゐるかの様にも見える、併しほんとうは東条の馬の方が既に一回余けいに巡り走つて来てゐるのである。緒戦の戦果はそれほどに大きかつた。二回目を走る馬と一回目の馬とが今や競つてゐる恰好である。スタート・ダツシユは得意だが、長期戦にはわれわれは不得手だと言ふなかれ嘗てわれわれは熊襲を肢属せしめ蝦夷を帰属せしめるのに、数百年の年月を費した。三韓以来朝鮮併合まで、朝鮮に対しては二千年の長い長い持久の政策をとつた。われわれこそ実に辛抱強い長期戦に最も得意な民族だと言へる。攻撃には強いが守勢に弱いと悲観してはならぬ。正成の千早城、赤坂城を思つて見るがよい。われわれは謀略にも秀でてゐた。素盞嗚尊の大蛇退治日本武尊の女装等はかりごとには昔から多くの伝承を持つてゐる。客観的情勢はことごとく我が不敗を示すもののみである。ただ主観的な迷妄が時に思想戦、神経戦に虚を作る恐れがあつただけである。而も諸君等多数の教養人、知識人が既に起つたのである諸君は大学生としての誇りに輝きつつ大学生なるが故に、知識人なるが故に益々頑張つていただきたいと思ふ。燃ゆるがの心臓と共にその冷静なる頭脳を持つて。

初陣の門出ほどまばゆくも亦華やかなるものはあるまい。私は太閤記十段目の場面を思い描く。十次郎の緋威の鎧の袖に配するに初菊の面はゆげなる姿態を想ふ。この期にのぞんでも、げに若人の出陣にふさわしいローマンチークな夢が秘められてゐてよいと考へるこのあはただしさをいろどる色彩がどの若武者の上にもあれかしと祈るものである。

最後に私は一人の経済史家として言ひたい一言がある。最少の努力を以つて最大の効果を収めることを経済原則と言ふ。この原則は総てに適用さるべきである。得るべ

き効果は、挙ぐるべき戦果は赫々たるが望ましいが、払ふべき犠牲はいつも小なるが好ましい。諸君よ。要は効果を挙げることである。幹部として立つ学徒は特に冷静に判断してほしい。武士道を死ぬこととするは、死によりてより大に甦へり得る可能性ある場合のことである。あたら武士が効果を挙げず散りゆくほどはかないことはない。散るべき時に散らねばならぬが犠牲は極小なることを真に望ましいとする。たゞたゞ武運長久なるを祈るのみである。また会ふ日まで。この学園、この教室に、帰還勇士の陽やけした不敵な面魂が、私の拙い講義を再び聞いて下さる日は果していつか。研学究道、その日まで私はたゞに研究報国の誠を致したい。温故知新稽古は単なる古への探求ではない。古に徹する心には過現未を照さんとの意図がある、戦乱の最中『神皇正統記』をものされた北畠親房卿の尊き勲を思へ。『邪なる者は久しからずしてほろび、みだれたるも正しきにかへるは、古今の理なり、是をよく弁へるを稽古といふ』米英等邪なるものは久しからずして亡びるであらう、国史は永遠に前進し、大東亜の共栄は久遠に栄えゆくであらう。しかも永遠であり、久遠なるが故に、いよよ益々これを永遠たらしめねばならない。これ実に諸君等若きものゝ肩にかせられた責務である。さらば行矣、雄々しくも亦安らかに情熱と共に理智を持ちて。

（昭和十八年十月十四日謹み誌す）

一法文学部助教授一

二人の兵隊の話」舟橋諄一

学生諸君の出陣に際して思ひ起すのは、法文学部在籍のまま支那事変に応召された二人の青年学徒、T君とM君とのことである。

T君は、法科を卒業後、研究室に残つて法律学を専攻してをられたが、お召しを受けて支那各地に転戦し、剣道三段の肚と腕前とに物をいはせておほいに敵胆を寒からしめたのであるが、不幸病を得て今は帰還してをられる。筆舌に尽しがたい行軍の辛さや苦しさや、二昼夜にわたる敵の重囲を漸く切り抜けた物語など、いろいろと戦場の話を聞かされたことであつたがそのうち特に心を打たれたのは、塵紙一枚さへも棄てたくなるといふ難行軍の背嚢のなかに、法律学の論文の別刷を入れて持ち歩かれひまひまに取出しては読み耽られたといふことであつた。帰還後早速に、その論文の筆者に対し、疑問の論点を問い質してをられた真摯なる君の姿が、いまもなほ眼にあるやうである。

もう一人のM君は、法科に入学後間もなく召集を受け、学生として在籍のまま勇躍征途に就かれたのであつたが、武運拙く上海戦の花と散つてしまはれた。後にいただいた父君よりの書面によつて知つたことだが、君が召集令を受取られたのは真夜中近くで、ちようど専攻の法律書を繙いてをられた時であつたさうである。父君は、早速準備をといはれたところ、戦線に立てば愛書ともお別れになるのだから、と答へられて、そのまま夜明けまで読書を続けられ、その夕刻入隊地に向けて出発せられたといふことである。

話は以上で終る。いま、わたくしがこんな話を持出したのは、何も諸君にこれを真似てもらひたいといふのではない。古への武人を偲ばせるやうな両君の心根の床しさを、出陣を前に静かに味はつていただきたいと思つてである。

一法文学部教授一

大学の叡知」田中晃

九月の学年試験が了つた日、経済科卒業生の某君と某君とが私の研究室を訪ねた。新しい日の丸を持つて来て、近く軍務に服するから一筆を乞ふとのことであつた。私共は固

より、若き学生諸君が、その学業を卒ふるや、殆ど悉く軍務に服することを知つてゐる。しかし今の今まで、わが学園の学生である両君から、日の丸の旗を差し出されたとき、この若きいのちを以て第一線の国防につくかと思へば、たのもしくも有りがたい感動に打たれた。私は即座に、某君に対しては

天津日を誓ふに立てよ益荒男の
いのちにかけて行くその道は

の一首を呈し、某君にも別の一首を餞けした。早急のこととて歌は固より拙かつた。しかし私の貧しい作歌の経験から言つても、苦吟に苦吟を重ねたやうなものにもまして、この一両首ほど、さながらの感動を以てしたことはなかつた。

かやうな感動のうちに今年の秋は次第に深まつて来た。平尾の山に住む私の家の庭には、夜をこめて鈴虫や松虫の声がしきりである。この静かな自然の推移のうちに、しかし漸く学園の決意を固むべき事態が現出した。いまや若き学徒の凡てを挙げて、これを軍務に送らんとしてゐるのである。

学生諸君のうちには、いま一年の修学によつて大学の業を了へ得るものもあれば、また今年十月初めて大学の門をくぐり、僅か三週間の研学を以て直ちに徴兵検査に赴くものもある。さうして各自の背後には夫々事情を異にした家庭がある。或は一人息子もあらう。或は貧苦のうちから父兄の汗によつて大学生となつてゐる者もあらう。それらの事情を、いまは凡て一擲して、喜んで国家の要請に挺身せんとしてゐるのである。寔に空前の事態である。

それにも拘らず、この慌しき空気のうちにあつて、学生諸君の粛然たる研学の態度には感服の外はない。諸君は今後暫くは学業より離別しなければならないが、さればこそこの最後の瞬間に、一つでも多くの真理に触れようとして、真剣に教室に臨んでゐる。大学教育に対する私の年来の杞憂は、この事実の前に単なる杞憂であることを証明した。私は今や大学生の叡知を疑はない。最後の瞬間まで学生の本分に忠実であることは総て軍務に服した暁に、またその本分に忠実であることを結果するであらう。由来、大学の卒業生は第一線に於ても、優秀な成績を示してゐると聞く。希くは大学生の誇りを一層発揮して貰ひたい。

それと共に吾々の深く考ふべき問題は、学問の本質に関してである。いまは詳論の暇はないが、学生諸君が総て生死の関頭に立つたとき、その覚悟に対して何ものかを寄与する学問でなくては、吾々は学生諸君に対しても、国家の要請に対してもその責任を全うしたものと言ふことができない。この責任を果すために、学問の真理は何処から汲みとられて来るべきであるか。抑々真理とは何であるか。学者もまた生命を賭してこの問題と格闘せねばならぬのである。

○　○

この号を最後として、本紙も当分休刊の止むなきに立ち至つた。この最終号へ執筆の依頼を受けて私は慌しく長崎への旅行に出かけねばならなかつた。旅館『諏訪荘』の欄に倚つて見る此の街の山河は折からの月明に照り映えて情緒纏綿たるものがあるが、私は遥かに学園の緊張を想うて此の一文を草した。

筑紫野の秋はしづけし其の如く
いのちをかくる心しづけし

（昭和十八年十月十一日長崎にて）

―法文学部助教授―

出陣の餞」永松士己

東西戦局の推移を熟視してゐた諸兄は寧ろ今日の御召をおそしと奮起された事でせう。若き学徒は即刻ペンを銃にとりかへて必ずや現下の危急を救ひ万邦無比の学園における勉学よりもいや増して崇高な国家目標に身を挺し沈着冷静十二分に諸君の有する賢明さを発

揮して国家の要望に沿はれることを祈念して出陣の餞を致します。勿論私も諸兄に劣らず学固を守つて死闘を続ける決意です。

ー農学部教授ー

文武一如」遠城寺宗徳

先達、知人の令息が法文学部に入学するため笈を我家に解いた。下宿のお世話などしてあげて、漸く納つたときに、新聞紙上に学徒動員の報道が現はれた。その日曜日の午後二人は、未だ暑さを覚える秋の陽を浴びながら、柿をかぢりながら談り耽つた。

出陣の日迄勉強するのだ。筆を投じて立つところに我等学徒兵士の矜誇がある。かりにどうせ戦争に行くのだからと、早くから学問を捨てることは、こと更に自らを匹夫に堕すものである。我々は我大学から出陣することに名誉と感激を呼びたいーなどと説教じみたことを言つたが、その私は自分が出征出来るやうにわくわくと感ずる若き感動を禁じ得なかつた。

さうだ、聖代に生れ遭ひ、最高の学府に学ぶの恩寵を享け、皇国興廃の決戦に際会しては、決然筆を投じて戦場に向ふこと、之が男子の本懐でなくて何んであらう。学を以て忠、剣を以て忠、文武一如の精神こそ、御身等大学生兵士の身上である。

いざ征け、我亦戦はん。私は居常愛誦の古詩、中原還逐鹿、投筆事戎軒……

人生感意気、功名誰復論を口吟み、今こそ『そのときが来たのだ』といふ感が深い。祈武運長久

ー医学部教授ー

応召の諸君を送る」不破武夫

何時かはそのことあるべしと覚悟しながらも、さて、此処に、今諸君が学業なかばにして応召せられるに当つては、定めて感慨無量なるものがあるであらう。諸君の応召に直面して、吾々は、戦局の現段階が容易ならざる事態に直面してゐることを、改めて知ると共に、また、此の際国家が諸君に期待するところの、極めて大なるものあることを思はざるを得ない。何よりも諸君は、最高学府に学ぶ選ばれた大学生として、剣を把るのであることを忘れないで欲しい。此の点について、諸君は、深き自覚をもち、常に高き衿持を失つてはならない。

何事によらず、よく事柄の本質を洞察し、且つとらはれるところなくひろく目を配つて合理的に判断し、其のゆびさすところに従つて正しく行動することこそは、学的精神の真髄でなければならぬ。諸君の今後に於ける本務は、第一線に於いて親しく剣を把つて敵撃滅に当るのであること謂ふまでもない。然し、時に少しく後方に勤務して諸般の戦闘準備に関する作業に専念し、或は時に、異民族の宣撫其の他の文化工作に従事することも、あるのではあるまいか。其の為すところの何たるかを問はず、諸君が学園に学んでつちかはれた高き識見と適切な判断が、諸君の言動を規定し、思ひもよらぬ深くひろき影響力をもつものであることを銘記せられたい。

大東亜戦は、固より撃滅戦たると同時に建設戦である。諸君が、暫くペンを棄てて聖戦に赴き敵撃滅に当るとき、諸君の言動のことごとくが、また直接に、大東亜建設の重大なる寄与であることを、十分に自覚してもらひ度いと思ふ

ー法文学部教授ー

任務をつくせ」楠本正継

今や諸君は長い年月に亘つて鍛へ来つた知識と心身とを以て、一意国難に赴く時が来た。教室の修学は平穏な読書講習の間に於てなされはしたが、その精神の在る所は風力勁急の下に立つに及んで最もよく其の面目を発揮する筈のものであつた。されば我々は惜別の情に堪へないままに、亦心靖んじて諸君を送り得るものがある。殊に此

数日間に於ける、諸君の落着いた毅然たる態度を見て、涙が出る程嬉しい感じがする。諸君は勇躍して学園を去つてゆき給へ。教つたものが受用に堪へたかどうか凱旋の日に聞かせて呉れ給へ。若しそれが烈火の煅煉を経るに堪へぬなまくらであつた時には其責の半は我々にも在るのだから。

なほ一言附け加へるならば、今後の諸君にとつて大切なことは、自己の任務に精魂を傾け悉すことだけだと信ずる。任務の命ずる所死するもよいし、生きるもよい。そこには前も無く後も無く、一刻一刻が充実した世界となるであらう。

ー法文学部教授ー

壮行」今井弘

今回、法文学部学生及び農学部の一部学生は学業半ばにして、敢然軍務に就かれることになつた。真に壮絶の感がある。この未曾有の断案を下すまでの当局者の苦慮を想ふ時、戦局は将に国運を賭せんまでの段階に在ることを知らざるを得ない。父兄近親の方々を始め、銃後を守る一般衆人も、ひしひしと緊迫するを覚へ、血の沸くを禁じ得ない。

途上に行き交ふ諸君の顔には既に十分の気合と決意の溢れて居るのを感ずる。その上に我々が申すべき何物もない。

謹んで　明治天皇御製を拝して壮行の辞としたい。

事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ

－工学部教授－

蹶起する学生諸君に」豊田実

諸君も知つておられるやうに、敵米国では多くの学生が既に前線に出で、近頃になつて父親応召が問題になつてゐるやうである。わが学生諸君の蹶起は決して早過ぎたわけではない、と同時に諸君に対する国家の期待もそれだけ大きいと思ふ。諸君の大学生としての自重と文字通りの奮闘に大なる望みが懸けられてゐる。今年東大の経済学部に入学した私の息子も入営の日を待つてゐる。私はこの際応召から帰還した或る学士が曾て東京の『帝大新聞』紙上で後進に与へた体験から出た三つの注意を記して、諸君の参考に供したい。私の担任の学生には既に話したことであるが、改めてその趣旨を記せば一入隊したら（一）黙り込まずに周囲の人々と明朗に語れ（二）飽く迄衛生に注意して病気になるな（三）たとひ一人でもよいからお互に血を啜り合う程の親友を作れ。予定の学会に出席のため二十日の諸君の壮行会に出られないのは残念であるが、私は心から諸君の武運長久を祈つてをる。

－法文学部教授－

征く諸君!」宇賀田順三

皇国の急迫した時局を体認する者こそ幸ひだ。皇国の難局を克服するの第一線に立ち得ることこそ望ましい。だが、それにはそれにふさはしい心身を錬磨することを心掛けたい。先づ心を練り心を打ち叩き心を育むことを専心した。それがためには、聖賢の書を読み神社仏閣を訪ね大自然に抱かれることもよいだらう。が、今一番心掛けたいものは親にかしづくことだ。心を傾けて『克ク孝二』を体認することだ。特に父母の生きませる間に己一生を傾けての親孝行をするの心構へを持つことが大切と思ふ。この短い二ヶ月をそうした心持ちで送りたいものだ。

それと共に健康に力を入れることは絶対に努めたい。弱いからだは何もならないことになる。それにはからだを大切にすることだ。父母に受けたからだは敢て毀傷しないばかりでなく進んで強壮にしてゆかねばならない。それこそ同時に皇国への御奉公の第一歩だ。征く諸君、心身錬磨の二つをかちとつた時己を空うして皇国の御為大君に殉ずることが出来る。空うした己は必ず生きている。

皇国の御為に大君のへに。

（昭和十八年十月十五日朝）

一法文学部教授一

老骨に鞭打たん」君島武男

国家の要請にもとづき、近く出陣せらるゞ学徒諸君の心境は

『けふよりは顧みなくて……』と歌つた、かの防人の其と全く同じであらうと想像される。

もし、最近に起りつゝある戦局の真相が、ありのまゝに諸君に伝へられてゐたならば、恐らくは国家の要請をまつ迄もなく、学徒の出陣が自発的に行はれて居たであらうと固く私は信じて居る。昨今の諸君の態度を見ても、覚悟の程が窺はれて只頭が下るのみである従つて出陣まぢかの諸君に向つて今更改まつて要望する何物もない只心から諸君の武運長久を祈るのみである。

其と同時に、我々の心掛けたい事は、第一線の諸君から、銃後は何をして居るかと云はれぬ様に、研究に、生産の増強に老骨の微力を致す事のみである

一工学部教授一

先ず死事を学べ」和田正雄

十月十五日工学部講堂に於ける大本営海軍報道部高戸中尉の『学徒蹶起の秋』と題する講演を聞いて感奮の余り涙が出て仕方がなかつた私であつた。大君の御召にあづかつて蹶起して錦旗の下に馳せ参んぜんとする学徒達の感銘如何ばかりであつたらう事は想像に難くない、高戸中尉は言ふ。『一度剣を取つて立てば生命の危険は如何なる所にも存在する。水の上にも、陸の上にも、将又空の上にも。生命の危険を念頭に置くのでは剣を持つて立つ資格がない陛下の御召にお応へし得るものではない。誰か百年の寿を保ち得るものぞ。要は死所を得るにある。光輝ある三千年の歴史を肯定し得るは今や諸君の力により諸君の生命による。今こそ正しく永遠の日本は諸君の赤き血潮を求めて居る』又日蓮上人は言ふ。『先ず死事を学んで後他事を習ふべし』と人間、命程惜しいものはない。死を恐れるが為に弱くなり、憶病になり、不徹底になり、打算的になり、卑屈になり、而して不正義となる。人生生活の欠陥は総て之に胚胎する。況や今将に大君の御召に応へんとする学徒達が正義の戟を取つて立つ時、先ず解決すべきは、日蓮の所謂死事を学ぶ事である。

曾て私は年若き少年航空兵と、ふとした機会に雑談した事がある彼は若々しく微笑しながら言ふ。『私達は死ぬる事を何とも思つて居りませんよ。全くなんです。上官から、おまへ達は必要があらば何時でも死ぬるんだぞ。おまへ達の命は、陛下の御命令で吾々が預つてゐる。と、之を毎日三度宛聞かされて、うんざりして居ましたが、だんだん聞いてるうちに、自分自身で、そうだそうだ何時でもお役に立つんだぞ。やるぞ。と言つた気持になつて、一年経つたらすつかり覚悟が出来て、もう死なんて何ともありません。お役にさへ立たば今でも平気で死ねるんです。只飛行機は最後迄持つて帰るんです。陛下からお預かりして居るんですから。愈々持つて帰れぬと決つたら一番有効に使ふんです。爆弾を抱いて自爆です。』

私はこの純真なる少年航空兵よりも更に頭の錬磨が出来て、日本の光輝ある歴史を、神にまします大君の大命を更に深く了解して居る最高学府の学徒達が莞尓として時こそ来れりと、錦旗の下に馳せ参じ、吾こそ陛下の思召しに応ふるものなりと、勇躍征途につき敵撃滅の戟を執られん事を願ふ。吾等も亦銃後にあつて大君の御命の下に優秀なる武器を一つでも多くの性能優れたる飛行機を諸君に送らむ事を誓ふ。（工学部助教授）

画家と軍人」武藤智雄

日清戦争が済んで後さる篤志家が、時の参謀総長川上操六大将に家を建てゝ上げることになり、襖や屏風は明治画壇の巨匠橋本雅邦

氏が絵筆を振はれることになつた

家も大体出来上がつた所で大将が引越して来られたが、毎夕帰宅せられる頃蒼惶に筆洗を洗つて帰り支度をするのが橋本画伯であつた片や絵心のない武弁、片や戦争を見たことのない画家。縁もゆかりもない二氏は最初たゞ目礼をするだけであつた。然し段々と目礼が時候の挨拶になり、打ちとけて言葉を交すようになると、よもやと思つた大将に見事に絵の話が通じ絵だけしか知らぬ画家にいくさの気魄もわかつて、やがて二氏は毎晩食膳を共にして尽きぬ話に興ぜられたといふことである。

『達人の域に入ると文も武もない同じ事なのですね。』

これが当時橋本画伯のお伴を仰付かつてゐた今の川合玉堂画伯の述懐である。

今度出陣される学徒諸君は、物心がついて間もなく満洲事変に遭遇し、謂はば大東亜共栄圏の指導者としてのわが国の発展と共に育つて来た若人である。諸君のこれまで身についてゐる心構へや修業が直ちに武の道に通じない筈はないのである。どうか元気に立つて頂きたい。そしてお互ひに、与へられた道に向つて邁進しませう。

一法文学部助教授一

若さ」吉岡修一郎

この新聞の停刊に際して最終の紙面のために原稿を求められたとき、私は直ぐに、新聞部の意気の盛んなことを感じた。間もなく出陣しようとする学徒たちが、最後の瞬間まで、学徒としての従来の営みを続けて奮闘してゐる姿を、私は目の前に見ることが出来る。このことは、新聞部だけのことでなく、恐らく学生全部の態度だらうと思ひ、少なくともさう期待したいと思ふのだが、新聞部にもやはりその能度があることを今、目の前に見せられて、私は、平素からの部の心構への程を知ることが出来たやうな気がする。学徒の営みは単に教室だけのものではない。むしろ今まで、教室の時間が長過ぎたとさへ思ふ。教室外の営みの中に、いかに多くの尊いものがあるかは、学徒自らがよく知つてゐるのだらう。この構へ方があつてこそ、今の場合、ペンと武器との差別なく、あくまで体当りのガン張りがきくのだと思ふ。

若い者には若さから来る創造性がある。だからまた驚くべき適応性もある。年寄りやうに機械的でなく末梢的でない。大局洞察の可能性もあれば、意気で乗り切る力と明朗さもある。昨年卒業した或る元気な学徒が、近頃前線から一寸戻つて来た時の話に、ちやうどさういつた話を私に聞かせて呉れた。その中で彼が言つたことだつた一戦場においても、年寄り臭い末梢論、機械論が幅を利かすやうな雰囲気が起るといつも、戦ひの作業能率が低下するといふ。それは士気に関する問題だ。どういふ場合でも、意気の盛んなことこそは最大の武器だ。

しかも、士気とか意気とかいふことは、創造力と洞察とから来るものであるのは言ふまでもなく、それは、こだはりのない叡知そのものと別なものではない。末梢にこだはることなく大局を見通す聡明な理智と行動との融合する所にだけ、学徒の士気といふものはあり得る。

ドイツでは、今度の日本の学徒新態勢をたゝへる一方、日本の余裕ある状態を寧ろ羨んでゐるという。事実吾々はこの羨望に値してゐるだろう。わが国が現に世界の本当の一等国であることを吾々は自負し、あくまで自主的な構へと見識とを持続すべきだ。何事に対してもまた何者に対しても、吾々は追従的であつてはならない。常に指導的で自主的!そして、創造的で理智的!これを若い学徒への餞にすると同時に、私自身への自警にしたいと思つてゐる。

知識人の誇りを堅持せよ」岡橋保

宣戦の御詔勅を拝せしときから、すでに諸君は今日のお召しを期待し、それを待望してきたことと思ふ。いまや諸君の進むべき途は明示され、皇恩に報ずべき機会を与へられたのだ。ペンを剣にかへる秋がきたのだ。大東亜戦争は共栄圏建設の聖戦である。破壊は建設によつて意義づけられねばならない。諸君がこの緊迫せる時局下において、これまで静かに学業に精進することを許されたのは、一つに広大無辺なる皇恩と、国家が諸君に期待するところがあつたればこそである。いまここに諸君が召さるゝにいたつたのは、単に剣はつはものとしてのみならず、文化の戦士としての諸君への期待による。聖戦は建設のための破壊であり、武力戦は経済戦、建設戦によつて裏付けられねばならないいまこそ皇国の危急に殉ずべき秋がきたのだ。諸君は砲煙弾雨のもとにあつても知識人の誇りを捨てることなく、与へられたる使命のうちに自己の世界を開拓せよ。苦難は諸君をたくましき実践力の把持者とするであろう。(一八・一〇・一三)

一法文・助教授一

学徒出陣に寄す」松枝茂夫

『古人の日く、朝に道を開いて夕べに死すとも可なりと。いま学道の人も此の心あるべきなり。(中略)後のこと明日の活計を思ふて棄つべき世を棄てず行ずべき道を行ぜずして、徒らに日夜を過すは口惜きことなり。只思いきりて、明日の活計なくば飢死にもせよ、寒ごへ死にもせよ、今日一日道を聞きて佛意に随つて死せんと思う心を、まづ発すべきなり。然るときんば道を行じ得んこと一定なり此の心なければ、世をそむき道を学する様なれども、猶ほしり足をふみて夏冬の衣服等のことをした心にかけて、明日猶明年の活命を思ふて仏法を学せんは、万劫千生学すともかなふべしともおぼえず。』

右、正法眼蔵随聞記より。なまじ自分のまづい言葉よりも、これを録して謹んで諸兄へのはなむけの言葉に代へたいと思ひます。

一法文学部助教授一

懼れず侮らず」小林榮三郎

『知識は力なり』といふ諺がある。何事もまづ充分の知識をもつことが、それに対処する方法を見出すゆえんである。我々は懼れず侮らず敵米英をよく知らねばならぬ。何といつても相手にとつて不足のない敵である。イギリス兵が陸戦で弱いことは定評があるが、海の上となると少なくとも今日までは鳴らしてきた。しかし何よりもイギリスの得意とするところは外交である。映画『世界に告ぐ』のボーア戦役当時までイギリスは『光栄ある孤立』を誇つてゐたが、この戦役で国際的孤立の不利をさとり、ヨーロッパにおけるドイツの発展、東亜におけるロシアの進出に備へてまづ日英同盟によりロシアを抑へ、日露戦役後は米露協商英佛協商によつてドイツを孤立させた。しかもロシアの地中海進出はイギリスの絶対に許容せざるところで、このためにロシアは幾度となく苦杯をなめてゐる。欧亜の天地に強国の出現をみると他を誘つてこれに当る常套手段は列国周知のところであるが、この手に乗せられる国が絶えない。イギリスはつねに相手の欲望を『知る』ことによつてこれを利用する。実に狡猾老獪である。今度こそは掛けられまいと要慎しつゝ、何時しか掛かつてゐる。今のスターリンもどうやらこの類らしい。アメリカの外交も決して馬鹿にはできないが、イギリスほどではない。敵として念頭におくべきことは色々あるが、私は能率主義の国たることを第一にあげたい。これは学問においても鑑取され、長所たると同時に短所をなす。しかし彼らの過去における能率主義への努力は今日の太平洋戦線でものを云つてゐる。我々はイギリスの社交に先手を打つて乗づる隙を与へぬ措置とともに、学徒諸君の伝統的な日本精神と既修の学識がアメリカの能率主義を克服し、史上未曾有の決戦を大東亜の勝利

に導くことに与つて力あるべきを信じて疑はない。

一法文学部助教授一

征く学生諸兄へ」高木暢哉

敵国が学生を総動員して戦つてある決戦のこの時、わが国だけが安閑としてゐられるものではない今度の非常措置はむしろ遅すぎた位のものがある。出陣を前にする学生諸君の決意は、きつとわれわれの想像以上のものであると思ふ事実わたくしの接する限りの人々から、すべてさうした強い意気込みが感ぜられて、いふべき言葉がないのである。

わたくしはかねがね献身といふことを、最も高い美徳であるばかりでなしに最も大きな喜びを永久に人に確保するものと信じてきたこの一生に愛すべき献ぐべき何物も有たぬ人の不幸を思つてもみよまた献ぐべきものを有ちながら献げることのできぬ歯がゆさを思つてみよ。しかるにわれわれは今日国家永遠の生命という献身の対象を有つてゐるし、さらにそれに今より献身することができるのである。これ以上に高貴で緊張した生き方といふのが世にあるだろうか。千載一遇の好機である。

わたくしは学校の廊下や教室においてみる諸君のうちから、何かなしに壮美をみる。粛々たるうちにもやがては激発せんとする若き力をみて、うなだれる。あとに残るわたくし達は、ひたすらに諸君の武運長久を祈るのみである。

一法文学部講師一

二千有余学徒総蹶起の秋」陸軍は十二月一日入営」海軍は十二月十日入団

大東亜戦局の苛烈化とともに政府に於ては、さきに情報局を通じて国内態勢強化方策を発表したが今回はそれを具体化しその実行の運びに至り、学徒の徴集猶予停止は兵役関係の勅令及び省令として二日公布即日施行された、これによつて全国学園を挙げて徴兵検査を受検することになり、理工系学徒は入営延期の措置をうけることとなつた。

斯て十二月一日を期して陸軍では入営、海軍では去る十五日、海軍省当局の発表によつて十二月十日入団することとなつた。

斯て全国数十万の学徒は一斉に蹶起して法文系学徒は直ちにペンを銃に、理工系学徒は入営は延期されたとは言へ、軍籍に在つて科学戦の戦士となることとなつたのである。

本学では前古未曾有のこの局面に対応して十五日大本営陸海軍報道部員の大講演会、十七日学徒激励の大運動会並びに音楽会、映画会、二十日には興学会主催の壮行会と華々しい行事を開催して出陣する学徒を鼓舞激励したのである学徒我等今ぞ蹶起す!『我等ならでは』の熱意に燃えてゐる九州帝国大学の全学生よ、その名に恥ず、健闘せよ

出陣への餞」学生課主催」大講演会開催さる

学徒出陣の大命は降つて将に国難に敢然赴かんとする時、西部軍司令部を偶々訪れた大本営陸軍報道部員佐々木克己中佐、並びに海軍報道班員高戸顕隆主計中尉、朝日新聞記者海軍報道班員竹田道太郎氏の三氏顕の来学を得、記念すべき大講演会が十月十五日午後一時より五時迄工学部大講堂で開催された、歴史的学徒出陣の意気に燃ゆる学生は定刻前より続々つめかけて四時間に亘る熱弁に始終熱心に耳を傾けた。以下右三氏の講演の要旨を記して学徒出陣の門出を飾る事とする。

一喜一憂する勿れ」内線作戦の真意に徹せよ」佐々木中佐の熱演

先ず大東亜戦争の現段階に於ける状況を詳細に説明し、その性格の根本を内線作戦に求めて、その意味、戦略上の得失を論じ内線作戦は困難ではあるが勝てない事はない、否むしろ鮮かな勝利こそ得られると結論した

然しこの内線作戦には命取りともなるべきニツの要素があるとして①内線圏を広くとり、

且つ確保する事②内線圏の範囲を適当にして目的を選定し、之を撃破することの二つをあげた、尚一層理解を深めるために原理的戦術として『展開』を説明し、依つて以てソロモンの実想を解明して学生の時局観に大きな影響を与えた。更に例を一次並びに今次大戦の欧洲列国の戦略にとつてその当否を論じて内線作戦は必然的に強い点をたゝかねばならぬ所以を明にして、有望ではあるが一層の努力を要することを強調した

最後に日本対反枢軸軍の飛行機の損害比率を実証的に示して現段階に於ける不調の原因を自主攻勢より受動態勢に推移した処に求めその対策としては量の増大を絶対に計らねばならぬ事を力強く結論した

学徒総賑起の秋」断々乎として征け」高戸中尉は叫ぶ

前提として世界の戦局を概略説明、ついで我国の立場に還つてその直面せる難局を指摘して学問は軽視してはならぬが国家あつての学問であり、又正しき国家観の上にこそ学問は立たねばならぬ事を力説して今次の学徒総動員に言及し、第一線に於て痛感して帰還するや直ちに『学徒立たずんばあらず』の第一声をあげたことを話して、学徒に対する限りなき信頼と期待とを示した尚ほ死生観については『死生一如』『死所を得よ』と懇切に悟した更に今次検査に関しては、海軍も入団した人は全部士官となつて陸軍と何等の差別待遇なき点を説明陸海軍何れに入るにしろ烈々たる気魄を持つて特に航空への進出を要請した

勝利の鍵を説く」竹田報道班員

『演壇は初めてで、見せ物に出された様な気がする』開口一番温和な話振りの裡に笑ひを混じえて僅か一ヶ月余前までいた西南太平洋における生々しい血戦の模様を静かに語り、数々の体験談、見聞談には思わず目頭の熱くなるのを覚える程であつた、最後に最も残念口惜しかつたことは結局飛行機の不足であり、そのためには新しい戦友が新しい飛行機と共に一時も早く第一線に行くより外に途のないことを力説して終つた

祈武運長久」木村修三

学業中にして出陣される諸子に対して私情忍び難いものがある。然し学業も国民の一生も本来国の為に存するものであるから諸子は私情を離れ曇りなき心持で出陣せらるる事と思う。私は残れる人々と共に教室を守り出陣せらるる諸子の御健康と御武運の久しからむ事を祈つて再会の日を待ませう。（農学部教授）

征け、而して勝て、」 司書官桜井匡

人間はすべて乱暴者である。宗教と道徳にいましめられて今日まで無事平凡に生きてはゐるが私もその例にもれ得ない一人である。然るに時局の進展につれて私の本性は敵性国に向つて一切の縛めをたち切つて了つた。

私は無鉄砲者のはげしい乱暴ぶりを思ふ。いざとなつて争ふ彼は相手の何たるを考へない。勝敗などは勿論、死も生もない。在り合ふナイフ、文鎮乃至筆墨何んでも手にとり得るものをとつて跳りかかり、相手を叩き伏せずには置かない。戦つて戦つて戦ひ抜く。

個人の喧嘩に於てかくの如し。今や吾々は我国家の敵に対して起つた。戦を始めた以上、文句は要らない。議論もない。手当り次第在り合うものをとつて敵にぶつかるばかりである。職業を考へ、身分を考へ年齢を考へてゐる時ではない。

学徒は起つた、諸君は起つた。吾等も起つた。文句はない、只戦はん。職場も講堂もまた戦場である。

御召を受けて将に発たんとする学徒諸君を送るに私は何の言葉ももたない。只諸君の壮なる意気、尽忠報国の精神が職場を守る吾々老骨に生気を与へ、敢闘精神を増して呉れた

ことに対して感謝する丈けである。此感謝を職場に示して闘ひ抜かう。大御稜威の御光の下で。

鹿島立つ諸兄に」金田平一郎

鹿島立つ家人の為に、神を祭つてその安全を祈り、そして影膳を据えるは、古くからの習ひである。

万葉集に

庭中の阿須波の神に小柴さし吾は斉はむ帰り来までに

今、諸兄出陣に当りて、斉ひ祈るは勿論、影膳も据えるであらう。私の影膳に盛るは、私の日々の研究である。そして、諸兄帰り来る日に、美味佳肴の本膳をと念願精進するであらう。

X

学徒の出陣は、人一倍男々しくあらねばならぬ、而してその勲功は大きく多からねばならぬ。万葉集に

霰降り鹿島の神を祈りつゝ皇御軍に吾は来にしを

一法文学部教授一

惜別」岡本順一

何ごとにまれ、自分が一式なじんだものは、たとへそれに精魂を打込んだとか何とか云ふ真剣な気持からではなくても、仲々捨てがてな、忍びがたい情がある。殊にわたくしにして見れば、折角お引受けした新聞部の仕事も、これからと云ふ時機にあつたのである。勿論、期待が往々にして結果を裏切る世の常として、海のものとも、山のものともつかない今の内に、やめさせてもらう方が、人間としてはとくなのかもしれない。

かつてわたくしがまだ学生であつた頃、昭和十六年の十月に突如緊急勅令によつて徴集延期繰上げが断行され、徴兵検査と同時に学年短縮のため、その年の十二月に卒業式が行われた。このことはやはりわれわれの人生にとつて、否定することの出来ないカタストローフェであつた。身辺の異常時に遭遇するのでもなくては、さうたやすく飛躍出来る技はない。今までの辛苦ある研蹟、全然未知の世界への強制、親に対する感情、死などと云ふ無数の想念が、当時走馬灯の如く頭をかけめぐり、胸の中には鬱々として割切れないものが残つた。けれどもわたくし達はそれ以上に、早く何らかこれに対する解決を見出したいと願つた。日本人として当然持すべき態度については、云ふまでもなくすでに誰もが知つていた筈である。その点に於ては一掬の疑点もない。たゞわれわれが得たいと臨んだのは、はかない生命に関する諦観、赤裸な人間としての信念、心に余裕を持つて必死になれる覚悟であつた。そして終日、わたくし達はこの問題について相寄り、相語つた。

わたくしが生まれたのは、山口県の萩である。その昔、明治維新にはこの地から多くの英傑志士が輩出し、就中吉田松陰先生はその指導者であられた。これまでもわたくしを失意と不安の中から、激励し、奮起せしめたものは、この郷土の無言の圧力である。わたくしはまづ、これらの人々の愛国一途の至誠に燃える言行の中に、悩める精神の打開策を求めた。その時たとへ功業はこれら諸先輩の偉大に及ばずとも、殉国の決意に於て断じておくれをとつてはならぬ、と肝に銘じてかたく心に誓つた。

又世に偉人と呼ばれ、文オと称へられる人々は、一体艱難に臨んで如何なる安心立命を体得したであらうか。失敗の連続とも云ふべき彼等の生活を、最後の勝利へと導いた努力は、何に原因するものであらうか。この質問に対する解答を模索して、わたくしはありとあらゆる有名な人の伝記を、二ヶ月の間手あたり次第無茶苦茶に繙読したが、それでもどうにか一の観念を掴出すことが出来た。それは永遠のエクスタシーと云ふことである。そしてわたくしもこの一瞬に、人生のすべてをかけ

て未練のない様な慰安の心地にひたらうと決心した。

この度のことは、わたくしだけの単なるセンテイメンタリズムかもしれないけれども、何か精神科学の敗北めいた、悲しい雰囲気が感じられていけない。それはひと頃栄えたサロン文化のはかない運命を連想せしめるではないか。従来の文化科学と云はれるものは、人間にとつて最も大切なあるものを忘れてゐるのである。しかしやがては再びルネサーンスが訪れてくれることであらう、わたくしはそれを強い確信を以て夢見てゐる又その意味でなければ発展もあるまい。

なべてうつせみの世の、心痛ましめるかゝづらひごとにして、終焉ほどげにげにしいものはない。わたくし自身現在、その感傷のさ中にある。全く云ひたいこと、書きたいことは、万感せまつて胸の内に山と積まれてゐる想ひであるだがこれら千万の思想を一応整理して、自分のものとするためにはなおしばらく時間の距離を要するであらう。

今はたゞ九州帝国大学新聞十七年の歴史を静かに見送るのみである(一八・十・十三)

一法文学部助手一

征途を祝す」吉井甫

国家非常の秋 大君の御召に与り敵撃滅の第一線に立つ、男子の本懐これに過ぎるものはない。一切の絆をたち切り一路邁進せられんことを望む

一農学部教授一

出陣の学徒に祈る」生井武文

南の海に激戦がつゞき
　一億の闘魂は火となつて燃える
将に皇国興廃の秋
　我に続けと若き学徒はペンを捨てゝ立上る
頑健なる肉体と不屈の魂もて
　一切の我を忘れ只管に国に殉ぜんとす
あゝ何たる荘厳の極みか
　一億は襟を正して学徒の壮途を祈る
戦局は将に苛烈深刻をきはむるも学徒の国をおもふ純情の赤誠は必ずや神にも通じ
米英必滅大東亜共栄の大業は若き諸君の手に依つて打ち立てられる
征け学徒諸君
　国民は皆諸君の武運を祈りつゝ老いも若きも
　総てを捧げて皇国の必勝を誓ふ
国おもふ若き血潮はみなぎりて
　我に続けと立る雄々し学徒は
（一八、一〇、一六）
一工学部講師一

学徒出陣に寄す」棚橋影草

（医学部講師）

すでに期す負荷の重きに学徒征く
学徒い征き秋天壮厳の光満てり
学徒征き学真正のすがたあり
図書室の窓輝きて学徒征く
あゝ学徒出陣の日の書を愛す
蒼穹に羽搏つは学徒い征きたり
醜の御楯と角帽を懸け白線捨てぬ
仇し国うたむ学徒に芝生ひろし
出陣のいとしづかにも秋日澄む
学園は淋しからざる講議間ゆ

堅確なる精神と」旺盛なる志気を」吉川大佐談

学内決戦体制、法、文、経、農学部学生の出陣等々のため忙殺されてゐる配属将校室は今回新たに堀江大佐を迎へ更に万全を期してゐるが学半ばに出陣する学徒の心得を吉川大佐に聴く

戦時に於ては銃後に於ても『予想外の出来事』と『不明の事』が多く生起するのであるが戦線に於ては更に一層頻発するものである之に対するの道は精神の堅確と志気の旺盛といふ事以外に方法はないのである。所望の時

期と地点に所望の兵力を使用し得る攻勢に比して防勢の不利とするところは『不明』と『思はざる出来事』とのために精神の堅確と志気の旺盛とを阻害せらるり所にある。皇軍の今日までのあの赫々たる戦捷は一に能く寡を以て常に攻勢を取り敵をして戦況の不明や思はざる事件に遭遇せしめ以て其の能力を発揮するを得ざらしめたことに因るものと思ふ、桶狭間における戦闘や今次のハワイの奇襲作戦はその好適例である、戦場において最後の決をなすものは常に旺盛にして執拗なる攻撃精神を以て遲疑送巡することなく果敢決行、断乎として攻勢を取り得るや否やである、就中交戦中不意の事件に遭遇した時においては特に然るのである、聖戦に参加する栄に浴する学生諸子は自ら進んで困苦と欠乏の中に身を投じて堅確なる精神と旺盛なる志気の鍛錬を重ね以て忠勤を励まれんことを切望する

法文会総務部挨拶」学園を去りて征くに当り

今回在学徴集延期の制度が廃止せられ、法文学部学生一同が第一線で直接働きうる機機会を得た。そこで現在まで活躍を続けて来た法文会が、諸機能を一時停止せざるをえざる情態となつたので紙上を借り、御挨拶方々今日までの法文会の実際の運行ぶりを述べておきたいと思ふ。

法文会は法文学部と表裏一体にある事はいふ迄もない。近来法文学部の気運が頓に活気を呈して来たと共に、法文会も亦その活動範囲を拡げて来たのは当然の事である。従つて切角此処まで来たものをたとへ一時たりとも機能を停止せざるをえないのは残念であるが国家の大事の前に一刻も早く全国民が戦闘配置につかねばならぬ時であるからやむをえない事である以下便宜上各部に分つて説明する

総務部…法文会の総括的事務を行ふのであるが、このため年一回の名簿発行を原則としてゐる但し諸般の事情の為三年一回の発行となり、最近に於ては昭和十七年八月現在のものを会員に御渡した。なほこの他総会を開き或は戦線の学友に慰問袋を送り或は勤労奉仕に於て学部当局を援助したりしてゐるが、毎年の予算を編成するのも一仕事である。

新聞部…九州帝国大学新聞の発行に関する一切の事務を行つてゐる、大学全体の責任の下に発行すべき新聞を一法文会の事業としてやつてゐるため、少い予算で而も僅かの部員で刊行せねばならず、部員の努力は実に涙ぐましいものがある。新聞を法文会で取扱ふ限り今回で廃刊せねばなるまいが、何とかして九州帝国大学新聞が発行を続けてゆける事を望んでゐる

共済部…会員の利便と福祉とを増進するため、現在に於ては食堂、本屋、文房店、靴屋、洋服屋、時計修理店を委託経営せしめ、喫茶店を直接経営しノートの配給交換売買の斡旋をし卒業証書を発送し講義に必要なるプリント迄印刷してやつている、而も部員の熱意は食堂の問題の解決下宿難の解決等厚生事業にまでも乗出さんとして着々準備をすゝめ、既に一部下宿の世話を行つてゐる。

特に食堂喫茶店は法文学部学生のみならず全学学生が利用している有様であり又靴屋時計屋、洋服屋等は市内選抜の商人が奉仕的努力をしてくれてゐるため、この面だけは何とか他学部学生の利便のため残しておきたい

学芸部…主なる事業として法文論叢を第三十三号迄発行したこの雑誌は他の大学の研究雑誌が教授連の執筆であるに反し学生の研究発表を記載している点に特色がある。学生の汗の結

晶が研究発表される機関をもつのは九州帝国大学法文学部をおいて他にない、この他に学理研究のための座談会を催し本年に入つて、高田保馬博士、宇野円空博士、本学の田中晃助教授等の御来会を仰いだ。何れも盛会であつた事を思ひこゝに感新なるものがある。

『体育部』…体育は何時如なる時でも必要である。兎角図書館にてこもりがちの法文学部学生に体育部のある事は誇であると共に、それだけに一層部員の計画及実践には苦心のあとが伺はれる。野球大会、闘球大会、水泳講習会等を各季節毎に行つた。又毎日中食時の休みを利用し軽快なる音楽にあはせてラジオ体操を行ふ風景は学生の方から盛上つた希望の成果であるだけに部員の熱意も一入である。体育部は法文会否本学中の各種の団体の中で最も明朗なる部である。

以上で法文会の概略の説明を終る。

今度法文学部学生一同が直接第一線にたつ事になつた。この事に対し各方面から色々の激励を賜はり、特に九州帝国大学興学会から壮行会その他絶大なる好意をよせられた事に対し紙上を借り厚く御礼申上ぐる次第である。

我々は宣誓式の日皇恩の万分の一に報ゆるはペンを執るも銃を執るも更に変る所はない。我々は醜の御楯と出でたつ日の近きを感謝してゐる。

我々を今日迄御愛顧下さつた諸先生並に学友諸君に重ねて厚く御礼申上げると共に今まで御心配や御迷惑をおかけした御詫は靖国神社で致すつもりである。

では懐しの九州帝国大学よ永遠にさようなら

最後に皆々様の御幸福と御発展とを御祈りする。

九州帝国大学
法文会総務部学生幹事
藤本玄一

出征学生」箱崎宮に参拝」御神符授かる

十九日午後一時半より工学部大運動場に集合せる総長以下、各学部長、教職員、学生、生徒多数は今回その大多数を出陣せしめる法文学部学生を中心に盛大なる壮行式を挙行した。

式は国民儀礼に始まり、総長壮行の辞ついで学生代表激励の辞、同じく答辞を以て一応本学に於ける式を終はり全学総長を先頭に歩武堂々箱崎宮に行軍、武神に学徒出陣を報告、武運長久を祈願し、神官より出征学生一同に御神符が授けられ、終つて東公圏元寇の国難に尊き御身を以て当り給ふた亀山上皇の御尊像を拝し、再び各学部に引返して学部長の壮行の言葉を享けてこの意義深き壮行会を終へた

休刊の辞」九州帝国大学法文会新聞部長」阿武京二郎

大東亜戦局は今や究極の勝利を確保すべき決定的段階に入り、去る九月二十一日の閣議に於て決定を見たる国内態勢強化方策に基き、我が九州帝国大学学徒も全員其の分に応じて夫々決戦配置に就くこととなつた。即ち一般的徴集猶予停止となり特に法文学部学生に付いては其の大多数のものは日ならずして学窓を出て本大戦の第一線に就かなければならない。学窓に止まる一部少数の学生もやがてあるべき御召の日を待ちつつしばし学業を続け得るに過ぎないこととなつた。かくて九州帝国大学法文会新聞部の事業として発行せられ来つた所の本紙は今や其の発行を一時休止せざるを得ざるに至つたのである

顧れば本紙は昭和二年六月十八日九州大学新聞の題号を以て其の第一号を発行し爾来号を重ぬるを二百六十九、実に十有六年半の

星霜を経たのである。而して歴代の新聞部長の熱心なる指導監督と新聞部委員たる学生の献身的努力とに依り其の時々の時勢に順応して克く十分に其の使命を達し且つ本紙の今日の隆盛を見るに至つたのである。此の永き歴史を有する本紙が一時本学から其の姿を消すことは本学内に一種のさびしさを与へることと思ふのであるが我が国が勝つためにはそれは些々たる一小事に過ぎない。今や一切を挙げて決戦に捧げなければならない。本紙の此の運命は決して悲しまるべきではない。謂はば本紙の休刊亦一種の応召に外ならない。私は実に戦線に就く勇士を送る気持を以て此の休刊の辞の筆を執つたのである。

本紙は郵送其他の手続上廃刊とせられるのである。しかし我が国の究極の大勝を確信し、其の来るべき日に於て本紙は又復活発行せらるべく、其の予想の下に於て本紙はこゝこ実質的には休刊せられることゝなるのである。私は本紙の休刊に方り、本紙の今日の隆盛を築かれたる過去歴代の新聞部長顧問並に新聞部委員に対し、又本紙の為に玉稿を賜はりたる学内及び学外の方々に対し、本紙の愛読を辰うしたる大方の方々に対して衷心深甚の感謝の意を表する。

吾々は本紙と今別れなければならないのであるが今又一時に法文学部の多数の親愛なる学生諸君と別れなければならないのである。初て私は新聞部長として本紙の休刊に付ての此の挨拶と共に法文学部の教官の一員として一言其□諸君に対する壮行の辞を述べなければならない。

惟ふに人の生涯には様々ある。其の生き方には尊いと価値付けられるものがある。宗教家として信仰のために殉ずることほど尊き生き方はないであらう。又学者として真理のために斃れることほど崇高な生き方はないであらう。国民として国家のために一身を犠牲にすることほど価値高き生き方はないであろう。しかし聖も真も国家を離れてはあり得ない。故に我が国では古来仏教は護国の仏教であつた。真理の探究も亦国家に役立つのでなければ所詮無用である。されば我が国では宗教家、学者の其の信仰其の真理のための精進は同時に国家のための精進であることが忘れられてはならない。真理のために死する人は又国民として国家のために死する人である。諸君は今日まで学徒として真理のために精進して来たのである。今や国家は諸君が学窓を出て大戦の第一線に立つことを要求して居る。大戦以来諸君は此の日を待つて居たであらう。其の日は来つたのである。今こそは諸君は人生最大の価値の要求に応じて心から其ために諸君の一身を捧げるのである。これこそ諸君の生の最も崇き生き方である。かるが故に私は諸君自身のために、諸君の家の名誉のために今日諸君の門出を祝福するものである。諸君は今其の人生最大の価値を自覚し其の価値のために一身を捧げるのである。されば諸君は諸君の一身を其のために最大限度に活用しなければならない。而して其の工夫をしなければならない。諸君夫々一人の身体を以て如何にして一人以上の奉公がなし得るかを工夫しなければならない。諸君は固より今日あるを覚悟し斯かる錬心の工夫には怠りなかつたことゝ信ずるのであるが今日此の別れに臨んで私は諸君に対して其覚悟に対する猛省を促す。而してそれを真剣に工夫せんことを求める。そこで私は諸君が如何にして存分の勇猛心を以て戦ひ得るかの道こそは今の諸君に対する至上の贈物であると信ずる。而して其の道こそ我が大乗仏教の法門である。しかしそれをば何人も諸君に与へる事は出来ない。只私は諸君の仏縁の熟せんことを希うのみである。即ちそれをば諸君は自身求めなければならない。而してそれを自身体得しなければならない。然るときそれは諸君に安心立命を与へる、諸君をして安住する所を得しめる、一切を楽しむ心を得しめる、そこでこそ諸君は実に諸君一人の力を以てではなしに実に千

人力万人力を以て戦ひ得る所の禅定力が養はれるのである。実にそれは諸君に超人間的力を与へる。北条時宗の師子元祖元禅師は来朝前故国に於て元朝から迫害を蒙り、或る日元兵禅師の温州能仁寺に乱入し、諸僧皆逃れ去つたが禅独り堂裡に踞つてゐた、虜酋刀を揮つて禅師の頸に擬したが禅師は神色不動、偈して日く

乾坤無地卓孤筇　喜得人空法亦空

珍重大元三尺劔　電光影裏斬春光

そこで群虜之に感じ懺謝し去つたと謂はれる。又武田信玄が其の不動の信念を養つた所の其の師快川禅師は信長の軍兵のために寺を囲まれ山門楼上に登り燃へ上る劫火の焔の中に『安禅不必須山水滅却心頭自涼』の末後の句を残して泰然自若として焼死せられたと伝へられる。斯かる禅定力こそは一騎克く数万の軍を相手として戦ひ得る力である。瘴煙弾雨の中を平歩し得るのは之に依つてゞある。諸君は此の金剛不壊の宝剣を以て万軍の賊叢を衝かなければならない。

己に禅門に帰依する諸君は益々浄信堅固にして道に精進せんことを誓願する、其の他の諸君亦勝縁を結んで此の道に導かれんことを誓願する。私は此の誓願を以て諸君の此の行を送る。而して甚だ駄作で恥しいのであるが、今七絶の偈一首を得た、其の未定稿を示して此の壮行の辞を結ぶ。

送九州帝国大学法文学部学生諸子応徴集行

一身許国志何尊　承召欣然去学園

般若飛機三昧銃　縦横屠賊報君恩

（一八・一〇・一五）

秋日絶唱」地階の生活から」蓮尾明

二日夜、山の家の床の中でころころと鳴くこほろぎの音に耳をかたむけてゐたとき、宿の主人が福岡から来た新聞を投げ入れてくれた二三日ぶりの新聞には"法文系学生の入隊"を報じてゐた。

その日山頂をきはめた疲れで電灯を消して寝につかんとしたが、何故かねむれなかつた、こほろぎがしきりに鳴く晩だつた、そのうち（法文会所属の大学新聞もこれきりだなァ）と思ひながらうつうつと夢の中に入つて入つた。

終刊号を二十日の壮行会までに発行しなければならぬと今日は新聞社の職工さん達に夜業してもらつて僕達部員は三階の一室で校正に忙しかつた。短い秋の日は暮れて中村、西光、岡の三君が遅い夕食をとりに外に出たあとは机の上には校正のゲラや原稿が雑然とおかれてあつた。ゴーッとゆく電車の響にぽんやりきゝ呆けてゐた僕はいつしかうす暗い地階の生活の回想に耽つてゐた。

天井の低い部屋は僕達部員の次の時間への憩の部屋でもあつた、雨の降る日には窓から見る法文学部の白い建物にかこまれた内庭に物静かなものが或るときには殺風景なものが見られた。

ガタンガタンとドアーの音がして部屋が一時に騒がしくなる、或る部員は今うけて来た講義の話の受売りをやれば或る部員は昨日街で出会つたメツチエンの話を持出しては議論となりパッと雑談に花を咲かせて次時間の鐘でさつさと引上げてゆく……

原稿の締切日が迫つてくると部員の仕事は忙しくなる、集つた原稿を新聞社にとどける、校正用のゲラが出来上つてくる、社に出掛けて校正をやるそれが済めば大組と発行までは多忙をきはめる、新聞社から刷るばかりにして印刷所に送れば数日の後印刷所から出来上つた新聞が地階の部屋に運ばれる、新聞がついたときは販売に出すことを忘れて見入り（あゝここをこうやればよかつた）といふ感がとびだす、それから広告文をそこゝに出して売るのであるが、それを買つてゐる人達を見ると何とも形容の出来ない暖かいものを覚える、新聞が売りつくされる頃には次号の編輯会議が開かれて黒板に執筆者の氏名等が記さ

れ翌日から部員は原稿依頼に速達を出したり学内を走りまわるのだつた

あの部屋で暮らしてゐると原稿を、自身でとどけて下さる先生のドアーのノックの音に驚かされ恐縮したり、有難かつたりすることがしばしばあつた、又嬉しかつたのは今年に入つて頓に学生諸兄の投稿がふえて来たことであつてあまり売れなかつた、去年が思ひ出されて来たもう二三日であの部屋とも別れるかと思ふとついつい過去形のペンの走りとなつてくる

永田先生を知るやうになつたのも部に入つてからだつた、先生にはいろいろ新聞編集のことにお言葉を戴いたばかりでなく私のことでいろいろお世話にもなつた、夜先生をお訪ねして色々お話をうかがひ、帰りを送つて来られる先生と春の夜の月をみたり、夏の海辺を逍遥したこともあつた。

思ひ出してみれば苦しいこともあつた、又楽しいこともあつて単純に子供のやうに騒いだものだつた。原稿の締切間近になつて待つていたものが入手することが出来ず弱りきつたすゑ西光君が部長の阿武先生に時日のないのに無理な原稿をお願ひしてやつと新聞の体裁をととのえたこともあつて、部長先生にはいろいろ御無理をお願ひしたものであつた。或る時は某大学の教授の論文で戦時下その論述ぶりが当局の忌避にふれるおそれから夜分遅くお宅にお訪ねしてその判断をあほいだこともあつた。原稿を顧問の方にお願ひするのもたびたびであつた、又高木先生には顧問を辞せられた後もいろいろ新聞の編集のこと、部の内外を問はず我々部員はお世話になつたものであつた、物静かに語る先生の口調が冷えびえする夜気の中に思ひ出されてくる

コツコツと靴音と一緒に話声がして三君が帰つて来た、ここで僕のセンチも中断されてしまつたがそのうち校正を急ぐ紙をめくる音のみの静かさにかへていつた。

やがて僕のペンの運びも疲れて来た、ばさりと大きな蛾が散らばつた原稿紙にはいつくばつて大きな羽をふるわしている（嫌な蛾だなア）とつまんで窓外に捨てに立つた、暗い窓下を電車が通つてゆく（今日もかへるのが遅くなつた）

編集や校正でつかれたあと、冷えきつた紅茶を飲みながら電灯のついた部屋でその日の某君のエピソードに大笑ひして散じたことなどが想ひ出されて来るのであつた

（十月十六日記）

部告

創刊以来十七年、第二六九号を算ふる我が『九州帝国大学新聞』は今回の在学徴集猶予停止に伴ひ、全部員の征くことと、略確実となりたるため茲に本号を以て休刊の止むなきに至れり。

抑も我が九州帝国大学法文会新聞部は昭和二年六月本学法文学部の教官、学生の熱意により『皇国ノ道二則ツテ会員相互ノ親和ヲ計リ心身ヲ陶治』せんとする九州帝国大学法文会の一部として発足せり。爾来『九州大学新聞』の題号の下に全学与論の指導と学術振興および教官学生の親和を計らんとする目的を以て学生新聞を発刊し来たれり。而して昭和十年四月二十五日附第一二六号以来『九州帝国大学新聞』と改題し更に重き使命を負ふに至れり。然れどもこの間編集事務はもとよりその他すべて法文学部学生のみの手により人的物的困難と闘いこの重大使命達成に努力し来れるも、更に時勢の推移は幾多の困難を生起せしめその打開に多数先輩の犠牲をみたり。我等現部員も之等先輩の苦闘の跡をうけ学生のみの手になるを誇りとしてこの伝統の維持発展に努力せるも世界戦局の変転は学徒をして学に専念するを許さず、遂に我等学徒の進むべき道は瓶子としてここに示さる。学徒の光栄これに過ぐるものなく、誰かこの秋を期せざる者あらんや、我が新聞部亦全員征かんとす、茲に於てか我が九州帝国大学新

聞は遂に続刊する能はず休刊するは将に断腸の思ひなり。

こゝに休刊に当り永らく一方ならぬ御後援に預かりたる諸先生並びに諸先輩愛読者の皆様に対し満腔の謝意を表するものなり。

九州帝国大学法文会新聞部

委員　中村英雄　西光健次

蓮尾明　岡茂男

新聞部に寄す」田中義磨

大学新聞に対し特別の関心を有する私として今本紙の終刊に際し知人の臨終に侍するやうな傷心を感ずる。併しそれは決戦下に於ける出来事であるだけに一種悲壮な寧ろ崇高な感じさへも禁じ得ない。本紙の最後を飾るにふさはしい背景といへよう。（上京直前博多駅にて）

ー医学部教授ー

部員諸君を送る」干潟龍祥

嘗て新聞部の部長をつとめたことの有る自分としては、この九大新聞がたとひ一時的にもせよ廃刊の止むなきに至つたと聞いて、洵に感慨無量である。少数の学生でしかも法文会の一部といふ制約の下に、新聞を定期発行していくことの如何に難事業であるかを当時つくづく感じたものであるが、それだけに部員諸君の奮闘振りを目撃して、これだけの犠牲を払ふ試練に堪へ得ておけば、他日社会に出て必ずや有能なる活躍をなし得るであらうと、卒業後の部員諸君に望を嘱して居たものであるが、さて現在の部員諸君はそれどころではない更に大きな試練に堪へるべく、卒業を待たで直ちに栄光ある軍務に着くことゝなつたのである。征け、部員諸君、ペンを銃に代へて。あのうす暗い部屋から広漠たる大東亜の戦場に。そこには十億の民が諸君の救援を鶴首して居る一法文学部教授ー

新聞部へおくる」三村一

拝敬　妖雲愈々東亜の四周をはんとするの秋、法文学園に筆を把れる諸子は俄に之を剣に換へんとし、為めに九大新聞は茲に姑く休刊の巳む無きに到れりときき離別の情に禁へず候

由来九大新聞には、当然のこと乍ら報道の迅速に欠ける所ありと雖も、記事の純化、報道の倫理化に特徴を見出し居り、全学の縮図報道として其の都度発行を待ちし者に候、訣別に際し洵に寂寥を覚え候勿々

昭和十八年十月十五日

（農学部助教授）

新聞部の部屋にて」永田英一

文科系学徒の出陣で、九大新聞も休刊になるだらうー

昭和十六年、冷気やうやく身にしむ頃、編集会議が終つても、部員はこの地階の暗い部屋から動かうともしなかつた。腕組みをしたり、たばこを吹かしたり、皆むつつり黙つてゐた。編集会議だけがそんなに苦渋だつたのではない。当時だれもが経験したあの重苦しい、胸を塞ぐやうな暗気…『祖国はどうなるのだ』思ひは一つだつた。

そして、つひに来るべきものが来た、豁然と天道がひらけた。

ー征きますよ、相手が英米なら、死に甲斐がある…

おとなしい某君がそんなことをいつた。もうどの顔にも光耀があつた。繰上げ卒業で、かれらは征途にいそいだ。

戦域は日一日と拡大された。残つた部員からも、学業なかばに、あとを追ふものがあつた。『近く雪が見られます…』かういふ第一信が部屋の黒板に貼り出された。

事態はさらに重大化した。学徒は空の決戦へー。

某君は汽車の窓から半身をのり出して、

ーー台はやる、きつとやるぞと笑ひながら拳をふつた。体あたりのことを言つてゐるの

だ。またその頃、ぼくは他の学校の同じ征途につく学生たちを送りにいつた。乗車場は灼熱の若い生命で沸騰していた。

一元気で征つてきます。

一頑張つてきます。

一やつてきます・・・

ぼくは手を握りかへすだけがやつとだつた。無言のまま紅い血潮を総身にあびてゐた。帰り途、可憐な顔、嬉しさうな顔々の映像に襲はれながら、ぼくは死すべき世代のこと、真に生きるべき世代のことを思つた。（そしてこの光栄の世代にぼく自身も属してゐる）日本は勝つ、断じて勝つ･･･闇の中を、ぼくは大手をふつて歩いた。

そして、情勢はついにこゝまで来た、文科系学徒の総蹶起一

今新聞部の部室は、最後の『出陣特集号』のために、異常な活気にみちてゐる。十七年の伝統をほこる九大新聞、学園のよき伴侶、よき代弁者…その最終号のために、部員諸君の動作の何とすばやいことか、顔々の何とはれやかなことか!

この新聞をもつて学徒は征くであろう、道義と理想の勝利のために、精神の勝利のために!それ以外の何ものにも、一切の勝利は拒まれねばならぬ。この意味において、精神教養の高い出征学徒の責務は絶対である。

終りに、九大新聞部の部員諸君のために、あの涙ぐましい忍耐とこの真摯な労苦にたいして、深甚の感謝のささげられるやうに!

（昭和十八年十月十六日記）一法文学部講師

らくがき」一部生活雑感一」中村英雄

『もう止さう』『今、新聞から手を引かう』と思ひながら、とうとう最後まで来てしまつた、といふのが僕の偽ざる気持である。之と共に、書落し得ないのは、之を相反する気持"どうかして新聞部に対するこれまでの不評判、不信用を除かう"といふ気持である一尤もこれは或る人に対する意地、我武者羅な意地張りによるのでもあつたが。

× ×

高校と異なり、大学では静かにそしてウンと勉強しようと思つて関門海峡を渡り、香椎の田舎に引込んだ僕であつたが、新聞に関係して全く四苦八苦、初志には反したが、誠に得難い貴重な体験を得る結果になつてしまつた、新聞編集など夢想だにしなかつた浅学非オの僕が総合大学の新聞に関係するなぞ、今から考へると、感慨無量といふよりも、寧ろ、その大胆さに我ながら驚き、冷汗が流れる思ひがする。実を言ふと、僕は新聞ではなくて以前から共済部に多少の興味を持つてゐたのである。

× ×

入学当初、高木講師より新聞部の窮状を聞かされ、且、嘗て、小学、中学、高等学校の先輩K氏が部員として活躍されたことを知るに及んで、手伝つてみる気になり、五月初めに部室に行つて先生から部員に紹介された時、折柄来合はされた永田講師から、だしぬけに、『やめない様にして下さい。すぐやめる者が多いがね。』と言はれた一言が妙に印象に残つてゐる。此の言の含む深長な意味は暫て自ら理解し、体験し得たのであるがその時はムカッとし『俺だけは例外になるぞ』とでもいう先生に対する、つまらぬ意地が僕を最後まで踏み留まらせた有力な要因の一をなしてゐた様に思はれる

× ×

部屋が話にならぬ程汚いといふこと、埃が山積し、日当りの悪い不健康な地下室、プカリプカリと破れ椅子に腰を下して紫煙を燻ゆらす様は上海辺りの阿片窟を聯想せしめるやうな部屋もいつとはなしに気にもならなくなつた頃、小南氏と共に二面科学欄を担当することになつたが、医、工、農、理四学部の教官に一通り接するのに、十一月まで約半年以上を要した。之が後に科学論文募集に如何程役立

つたことか。併し乍ら各学部、各科、各教室を次から次へと誰彼の区別なく歩いて廻ることの苦しかつたこと。頭から叱り飛ばされたこと。皮肉を言はれたこと、皆忘れ得ぬ部生活の思ひ出である。そうして今日、とにかく、気難しい科学者に筆を執らせるコツを若干でも会得し得たと思へるのも、この半年以上の学部廻りが随分と与つて力あろう。

× ×

部生活を回顧すると、公事、私事共に思ひ出すことが山程ある。苦しかつたこと、楽しかつたこと、嬉しかつたこと、悲しかつたこと、新聞が気紛れではなく、直ちに責任を問はれるものだけに、内部に色々と複雑極まる要員を含む九大新聞の関係者の立場のむつかしいことは想像の限りでない。

僕の部生活は僅か一年余りであるが、幾多先輩が苦闘しつゞけたこの名誉ある九大新聞を受継ぎ僕の時代になつて、全く余儀ないとはいへ、休刊することになつたのは申訳ない次第で、このあわたゞしい帰郷の前の短日月の最後の編集の間にあつて、ものにしたこの拙き一文は、文字通り『らくがき』であり、『雑感』にすぎぬことを断つて筆を掴く。(一八・一〇・一八)

九大新聞」此の一年

かねて、今日あるを覚悟してゐたとはいへ、かくも鮮かに電光石火に伝家の宝刀が抜かれてみると基礎薄弱な『九大新聞』が、根底より動揺するのは全く無理からぬことである。勿論、部員の一人一人が落着を失つてゐるといふことは絶対にあり得ないが、我々部員が責任の重大性を痛感する丈に、後始末を立派に付けて置きたいと考へるからである。固より我々部員一同生還を期してをらぬ。さればといつて、我々は決して此の『九大新聞』の有価発展に努力せられた諸先輩の労苦を思ぬ者でもなく、来るべき勝利の栄冠を担つて本学に学ぶべき後輩の事を考へぬでもない。我々は只一年前後の関係ではあつたが、この末曾有の難局に際会してゐる今日、一人の後継組も残さずして、立消ふの危険性を予想しながら去るに忍びないのである。

我々には『後をたのむぞ』と言へる者がゐないのである。

◇ ◇

茲に、新聞部来し方一年の出来事を辿るのも蓋し無意味ではあるまい。

昭和十七年十月部員募集六名の（優秀なる）新入部員獲得内訳法科三名経済科一名文科二名、新入生歓迎会開催本月二回発行

十一月　二光社との交渉紛糾遂に五日号が三十日に発行二十五日間の遅滞に依り八方に迷惑を掛く

十二月　待望の組版が西日本新聞社に於てなし得るに至る、之にて印刷用紙の問題一応解決、更に紙面は十五段となり活字鮮明『新聞』の体裁一段と整ふ。主として古賀学生主事、高木先生の御尽力並びに西日本新聞社の御好意に依る。都合に依り半ベラとなる

昭和十八年一月　広告欄一新、大明通信社との契約成立し一切を委任。部員の広告取の労苦も解消

二月　部長並びに顧問更迭不破教授高木永田両講師には永らくご尽力されて解任、新たに部長に阿武教授、顧問に守田、明石両助手着任饗庭部員応召御健闘武運長久を祈る

三月　新予備編成さる諸経費の増高に依り予算増加するも総務部関係者各位の御好意に依り全額承認を受く

四月　四頁に復活弘研社との広告契約成立売れ行急増機構改革問題に就き諸先生の御尽力を乞ふ

五月　甲紙配給系統確立部員脱退続出、難問頻発遂に月一回の発行となる、関東関西各大学新聞視察のため中村委員上京

六月　中村委員、母堂重病のため帰郷残留三部員にて大車輪の活躍

七月　蓮尾委員応召、本月下旬帰郷して委

員に後任

八月　定期休刊

九月　小南委員卒業、都合に依り半ペラにて発行

十月　学生総賑起!全部員出陣遂に休刊を余儀なくさる

思ひ出」西光健次

情熱の捌け口を求め、文化的要素の育成を目指し且つ社会的体験の一端を体得せんと。僕が入部したのは昨年の十月、入学式後間も無い頃であつた、新聞編集に就ては全然未経験なので最初の内は何もかもが事珍らしく事毎に失敗を重ねてゐた、当時も部員が不足であつたから入部当日其場で早速校正と割付を手伝はされ一目で容易ならぬことを感じた、二三日後更に今年卒業した小南さんの家で夜十二時近く迄割付を手伝つた時愈よその感を深くした。

大学新聞の使命に就て或は大学新聞の権威と意義と価値とを如何に認識するか、その在り方をジャーナリズムとアカデミズムの総合的統一体に求めた時、夜が既に明け放れてゐたこともあつた。原稿取りは苦手であつた、恐る恐る手をふるはせつゝ名刺を出し口ごもりながら原稿を依頼する態は全く傍で見てゐられないものであつただらう、断られた時には駆出しの記者の悲哀を感じ、原稿を入手した時は丸で凱旋将軍の様な気持であつた、殊に予定の原稿数が集らず全く途方に暮れた挙句まさかと思ひながら依頼した所案外気易く引受けて貰つた時等その先生が救世主のやうに見えた事もあつた、我々の努力を察せられて何時でも早速引受けて戴ける先生、婉曲に結局は断られる先生、引受けられて安心してゐると突然投げやりをされるのが常套手段の先生等々新聞を通じて看取せられる先生の諸相は全く教室外のものであつた。講演会も原稿を取らねばならぬと思ふと全く楽な気持でなく講堂の片隅でペンを走らせた事も幾度びか。編集会議は甲論乙駁静まりかへつた夜の学内に唯部室のみ明るく精粋を絞る

印刷所問題、紙の配給問題、部員不足に伴ふ策、機構改革問題等等ぞくぞくと出て来る問題は本紙に幾度か脅威と危機を与へた、その度毎に全員一致協力して何とか突破し続けて来た『和』の尊さが今更の如く痛感せられる。

めぐりめぐつて一ヶ年漸く部の生活にも慣れ始めた頃突然襲つた学徒出陣は本紙をして休刊を余儀なくせしめた、本号こそ僕にとつては満一周年記念号であるがそれが又終刊号にならうとは。

思出は尽きぬ、在部生活僅か一年、期間こそ短けれその間生起した幾多の事柄は僕にとつて筆絶に尽し難き経験と教訓を与へ終生忘れる事なき思出とならう。

最後に我々のため影になり日向になり指導鞭撻し部のため尽力して下さつた阿武部長先生、高木先生、永田先生、岡本さん、安田さん、小南さん並びに他の部員諸兄に厚く感謝の誠を捧ぐるものである。（十月十六日夜）

回顧一年」岡茂男

顧みれば私が九大新聞部に入部してから早や丸一年が経過した。ふとした機縁によつて全く未知の新聞部に入つたことは今から考へてみても文学的な才に乏しい私としては一寸冒険に過ぎたようである校正のイロハから三面記事を書き初めるには相当の苦心もしたが先輩諸兄の懇切な導きにより、又周囲の事情の激変によつて何も分らない私にも続々と重い任務が課せられて未熟乍らも一通りの仕事には慣らされてしまつた。

一年の大学生活を顧て生活の重点的主流が新聞部の生活の中に在つた事を考へて今更乍ら驚いてゐる。入部当時法文経七名の新入部員と六名の先輩の十三名からなる部生活は亦楽しいものであつた。最も嬉しかつたことは私の先入観の中にあつた所謂ジャーナリス

卜的な埒薄な気風が全然なく皆一様に夫々の理想に只管邁進してゐる力強い真面目な態度であつた。就中私の忘れる事の出来ない経済学に対する情熱を育てて戴いた高木先生、饗庭先輩の居られたことである。忙しい生活の中にも色々と親切に指導して下さつて部の生活に追はれて学業を軽視する様な結果に陥らなかつた事は私自身としても満足に思ひ感謝にたえない所である。大学生活はともすれば孤独な生活になり勝ちであるが、部長先生、顧問先生はじめ十三名の部員との家族的な生活は私の一年間の大学生活に如何ばかりのうるほいを与へてくれたことであらうか。

顧みて私が部生活の中で最も苦しかつたことは部生活と勉学との調和を得んとしたことであつた。両立させるために払つた努力は決して無駄ではなくむしろ充実した学生生活を送る事の出来たのは今や中途にして征かんとする私にとつて大いなる慰めである。

最終刊号としての学徒出陣号を出すために西日本新聞社三階の一室で中村、蓮尾、西光の三君と共に最後の筆を執つてゐる。十一時も早や過ぎて夜も遅い。思へば右三君との交りは深く不肖なる私の啓発された所は大きい。苦しい校正の一時を終へて熱いコーヒーをすすり乍ら打とけた話の中にどれ丈教へられたであらう。

終刊に当り、部生活を顧みて感慨の一端を記した次第である。余りに私事に亘りすぎた事はお許しを願ふ次第である。

九州帝国大学法文会新聞部
部長　阿武　京二郎教授
顧問　安田　元助手
同　岡本　順一助手
委員　中村　英雄（経）
同　蓮尾　明（経）
同　西光　健次（法）
同　岡　茂男（経）

『九州帝國大學新聞』第269号（翻刻）
2023（令和5）年12月1日
九州大学大学文書館作成